三商同窓会報

No.50
平成23年7月1日発行

ホームページアドレス　http://www.daisanshogyo-h.metro.tokyo.jp/

体育祭
平成23年５月23日（金）

３月11日　宮古市光岸地（こうかんじ）
この防波堤を越えて来た波で破壊されました

写真提供者
24期 佐香義彦

同窓会新年会

第三十期　理事　藤倉久男

平成二十三年二月五日（土）正午から同窓会新年会が錦糸町東武ホテルレバント東京「龍田」の間で開催され、四十九名のご出席出を頂き、二時間半和気あいあいに旧交を暖めた。

司会は鷲嘉雄さん（二十八期）が務め、はじめに、ご逝去された恩師、同窓の方々に全員で黙祷をささげた。

伊澤宏祐さん（二十八期）の開会の挨拶に続き、同窓会会長柴﨑晴雄さん（二十五期）の挨拶。

「会長に就任してこの五月で満三年になります。二年後の四月二十九日が同窓会八十周年を迎えます。今後とも皆様のご協力をお願い致します」

大澤 昇　都議会議員

来賓挨拶は佐藤俊一副校長

「今年の入学予定は推薦入学五二名、一般入学一五八名、倍率は一・二五倍。特に野球部の強化を図っており、八名受験で五名が入学予定。因みに昨年は四名受験で一名入学でした。」とのお話しを中心に母校の現況を話された。

続いて大澤 昇都議会議員。同氏は三商のご出身ではないが、地元森下のご出身で、三商の敷地を効率的使用の陳情でご尽力を頂いた経緯がある。ご多用のところご挨拶を頂き有難うございました。

乾杯のご発声は、細田安治さん（十九期）。細田木材工業株式会社会長で、喜寿を迎えられ、益々お元気でご挨拶を頂いた。同社は三商の卒業生を多く採用して頂いており、感謝致します。

乾杯の後は懇談会。丸い六卓のテーブルからは笑い声も聞こえ、司会者から「近況報告を」との声に、各期毎、あるいは会計人会、双六会、木擇会、三水会等が壇上に上がり、母校での思い出話、近況報告等の挨拶が行われた。

楽しいひとときは、あっという間に迫り、全員で校歌、応援歌を声高らかに合唱。校歌の指揮を執るのは大嶽清さん（十二期）。応援歌のリーダーは三川廣志さん（三十四期）。全員の顔に青春時代の面影を見ることができた。会場が割れんばかりの熱気の中、閉会の挨拶は藤倉久男（三十期）『中締めは一本締めをお願いしたい』と、その由来を説明し、賑やかに手を締めた。

古田さん（二十六期）より寄贈された三商の校旗の下、記念撮影。

今年も同窓会への支援を約し、意義のある新年会は盛況裡にお開きになった。

同窓会 定時総会報告

（第一部）式辞

平成二十二年七月三日（土曜日）、東武ホテルレバント東京にて開催。

天野校長はじめ来賓三名、会員五四名の出席のもと、定刻午後五時より、土方副会長の司会で始まる。

一、同窓会会長挨拶
二、来賓の天野校長のご挨拶
三、事務局より会計年度二期分の一括事業報告
四、感謝状贈呈
　河原啓介、出町　豊、亀田光昭　三氏の感謝状贈呈の後、大澤 昇都議のご挨拶をいただき、恒例にしたがい左記の通り記念講演が実施された。
五、記念講演
　講　師　亀田光昭氏（第二十九期卒）
　　学校法人村田学園理事長

（第二部）懇親会

記念講演に引き続き、辻井監事による乾杯発声で賑やかな懇親会に入った。今回も新しい会員（第七七期卒業生）が数名参加され、未成年者のためアルコール抜きでいろいろ話が盛り上がっていた。

なお、この日、「三商同窓会報（第四十九号）」が刊行されたので、出席者には全員配布された。

閉会は、三浦副会長（三十一期卒）により閉められ、盛会裏のうちに解散となった。

十期六組クラス会

第十期　荻野文雄

十期六組クラス会が平成二十二年十月八日正午、神田一ツ橋の如水会館で開催された。

出席は井戸武一郎、太田誠一、木村一雄、小林英二郎、平野欣二、森正俊、安村吉之助、荻野文雄。太田世話人の挨拶、健康を祈って乾盃、全員から近況報告。殆どが本人やつれあいの病患のこと、高齢と共に避けられない道だ、いかに上手に付き合ってゆくかであろう。

職を離れて久しいわれわれは話す仲間も機会も少ない。気心を知っている級友と、鮨を摘み、ビールを飲みながらの閑談は楽しい。宴会場は名門クラブらしい雰囲気とサービスがあって快適であった。

席を替え、ラウンジでコーヒーを飲みながらの話題は、戦時下の授業と先生方の月旦。

清田先生の簿記、市川先生の英語、木村先生の公民、佐藤（義）先生の国漢、宇梶先生の体操、小関中尉の教錬など。厳しく叱られたことも歳月を経れば懐かしい想い出だ。三時、来年の再会を約して散会。

（平成二十二年十月十一日記）

昭和16年、５年生 木村与吉先生の「公民」

十七期会

第十七期　飯田幸男

十七期生も大半が傘寿を迎え、会員或いは伴侶の殆どが無病息災は難しく病を抱えながら日々を過ごしているのが現状である。私事で恐縮ですが私も昨年九月に「癌」と宣告され四ヶ月入院放射線と抗がん剤による治療により地獄の一丁目から戻ってきた始末。従って校歌祭は初めて欠席した。地震の頻発もあり今後の行事予定を考慮する時期だと感じている。

◆行事報告

・校歌祭

十月二日、日比谷公会堂で。今回もなんとか終えたが、参加者が相変わらず少なかったと聞き及んでいる。

終演後、昨年同会場で反省会。十七期の参加者数聞き漏らした。

・忘年会

十二月五日。例年通り三菱養和会巣鴨パルテールで。参加十三名相変わらずの盛会。生田、大庭、星、溝口の諸兄はこの会には毎年参加。この一年の無事を喜び、来年の息災を祈りながら、鍋を囲み歓談。

・お花見

例年実施してきたが開花時期の予想が難しく会場も確保が困難な事もあり本年から中止。グルメの会に変更した。

・グルメの会

平成二三年四月十日築地在住の渡辺兄の伝手で日本料理の名店「つきじ田村」で開催。大崎、石田、岩田の諸氏等珍しい顔ぶれを含めて十一名。旬の食材を最大限に生かした日本料理で美味しいひとときを過ごし次回十月の校歌祭での再会を約して散会した。

・その他

昨年は既報の通り年初に岩尾兄を見送ったがその後は訃報に接することなく一年を過ごすことができ幸いであった。この一年も引きつづき諸兄の健勝を祈る昨今である。

第十四回「二十四期会」開催

第二十四期会代表代行　福原　伸行

学校から銀座へは、都電でも都バスでも、一度乗り換えで行かれたのだが、三笠会館へは入ったことが無かった。並木通りの店の場所はよく知ってはいたけれど、高校生が出入りするような気楽な雰囲気ではなく、通り過ぎるだけで淡い憧れを持ち続けていた。卒業して五十余年、三笠会館では二度目になる我が二十四期・「同期会」を開催した。

「クラス会」「同期会」の幹事役をされている方々には共通の悩みがあろうかと思う。卒業してすぐの時期には何度か開催するチャンスがあって、その後の約二十年が空白の時期になりやすい。進路にもよるが、この時期は誰もが仕事、恋愛、結婚、育児等社会人としての責務を果たす道を辿る。「クラス会どころじゃない」日々の生活に追われた時期を経て、四十代に入って一段落、「たまには学校時代の仲間に会いたいな」という時が来る。この時が「クラス会」復活のチャンスだとぼくは勝手に思う。実際、二十四期会はこんな時期に復活（第三回目を開催）して、以後三年に一度と決めて、去年第十四回を開催できた。計算すると復活の時期は我々（二十四期生）がちょうど四十歳の時だった。

勿論この間も各クラス会はそれなりに続けられていた。

特に自営組は「サンパチ会」と称し、毎年三月八日に開催しており、最も意気盛んに活動している。幹事に人を得て。運営を任せていられる特別な環境にあることも幸いしている。

男子組のひとつは他クラスからの飛び入り歓迎で、やはり毎年開催している。ぼくが所属するクラスは「毎年三月の第一土曜日」と決めて亀戸駅近くの同じ店で、もう三十年も続けている。この店の主も（ずっと若いが）三商卒業生だ。

「二十四期会」は当初築地にあったもう少し大衆的な店を会場に、何年も同期会をやっていたのだが、この店が無くなって会場を替えなければならなくなった。

新宿、両国とあちこちやってみたが、思うように行かない。幹事さんたちの了承を貰って、やっと懐かしい、憧れの銀座へ皆で行けるようになった。

前回の印象や費用対効果の按配を充分に話し合い会場として決定した。特に今回について幹事としてしっかりと考えを決めていた点は、開会時刻を午後一時とする、ことだった。会員の年齢、遠方からの参加者の利便を考慮した結果、かねてより懸案の昼の時間帯での同期会が実現した。

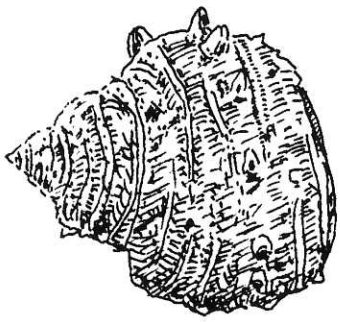
平成二十二年十月十七日、今回の出席者は七十六名とこれまでで一番少なかったが、会場には懐かしい元気な顔が揃った。当日のプログラムがいつもどおりに進められた中で、物故者へ捧げた黙祷の時間はさすがに厳粛なムードだった。二十四期担任恩師は、三商十二期卒業の吉岡先生お一人になってしまった。我々と歳の違いは干支一回りだが、相変わらずとてもお若い。

現役時代と同じように我々を叱咤激励して下さる。今回も張りのある声で老け込む我々にカツをいれて頂けた。

三年ごとの同期会というのは、若い時は兎もかく、間が空きすぎの感が否めない。冗談で「三年後までおれはもたないよ」なんて言葉が聞かれるが、「次を楽しみに頑張るわ」というひともいる。結局、「また三年後」ということに落ち着いた。

お開きの時刻、誰かが「校歌を歌おう」と予定外のことを言い出して、みんな大喜びで歌いだした。歌いながら幹事役としては、次回は何とか伴奏を用意しようとか。歌詞カードを忘れずに用意しようとか、次のことを考えていた。

日曜日の三時過ぎ、早い時刻の閉会だったので、その後の時間をそれぞれ有効に使ったらしい。親しい友とゆっくりとティータイムを楽しんだり、合同のクラス会を組もあったようだ。幹事としては、皆さんに楽しんで頂ければそれが何よりで、自分の先があるか無いかを考えることもなしに、また幹事役を引き受ける心算でいる。



二十二期の皆様へ

第二十二期　同窓会理事　篠崎　清

皆さんお元気のことと存じます。

昨年の三商同窓会報でも触れておきましたが、振り返ってみますと平成十六年に卒業五十年会を、同十八年に古希を祝う会で、皆さんと顔合わせしてから丸五年が経過してしまいましたので、今年は同期会を開催することに幹事会で決定しました。

詳細に付きましては後日幹事からご案内を差し上げますが、取合えず決定しておりますことだけを記しておきますので同級生同士お誘い合わせて一人でも多くの参加を希望しております。ご協力の程よろしくお願い申し上げます。

記

月　日　平成二十三年十月十六日(第三日曜日)
正午開会
会　場　船橋グランドホテル
(船橋駅北口下車三分)

毎年開催の二十六期…想定外のストップ！

第二十六期　古田　勝一

『「こういう時こそ開催すべし！」「いや、中止にするべき！」・・・・・・・』

賛否両論、交錯する中、苦渋の選択ではありますが、批判あるのは当然のことながら総合的に判断致し、私・古田の責任と主導で「中止」が適切と最終判断をさせて頂きました。

おっといけない、話が後（あと）・先（さき）になりましたが、これは二十六期同期会のことです。

私共、二十六期生は一昨年、三商・草創期にゆかりのある「帝国ホテル」で卒業五十周年記念の同期会を盛大に挙行し、昨年は「古希」を記念し「八重洲富士屋ホテル」でといった様に、還暦を迎えた十年前からは毎年開催して参りました。今年は通算二十三回目を六月十八日「東武ホテルレバント東京」で…と準備を進めておりました。

三月十一日…かつて無い大地震・津波・それに続く原発事故…等々。未曾有の大災害となり、日本のみならず世界を震撼させました。

各クラス（一組～九組）が当番制で幹事を受け継いでおりますが、今年は三組が当番でしたので、代表幹事の小宮邦彦さん始め三組の皆様と話し合いました。

『「中止」にするならば早く連絡をした方がベター』ということで、挨拶文のたたき台を私が練り、アレンジを深瀬剛男さん・杉本光男さんにして頂き、四月一日に発送完了…。

又、阪神・淡路大震災の折は二十六期として募金活動を致しましたが、今回は個々の各界への芳志に委ねることと致しました(余りにも被害が広範囲で、東京近郊迄「液状化現象」でインフラ等々が侵されてしまい、義援金も支援旋風化し、ルートも多岐に亘っておりますので)。

今回の大災害に伴う過度の自粛は、日本全体にとって経済的にも心情的にもマイナスであるので、もっと前向きに考えるべきとの建設的な意見…

この様に開催推進派・慎重派の考えが分かれますのは当然のことであり、いずれも同期会への熱意と善意から顕在化したことであります。

同窓会事務局長の杉本光男さんには、東京スカイツリーのお膝元・業平町会長であります関係から、東武鉄道系列の「東武ホテルレバント東京」を予約して頂いておりましたが、快くキャンセルに応じて下さり、同窓会副会長の岩瀬和子さん共々、いつもながらの側面からのご尽力で「中止」案内文をスムースに印刷・発送迄して頂きました。

二十六期の仲間の情熱で、ここ迄欠かさず続けることが出来ました同期会を中断することは断腸の思いであります。

未曾有の危機をどう乗り越えるか、日本人の真価が試されている今、一日も早い復興を願い、併せて来年の二十六期同期会には三組を中心に仲間が元気に数多く集える様願わずにはいられません。

卒業して十年過ぎて思うこと

第六十七期　ヤングOB会代表　評議員　秋元　真一

早いもので母校三商を卒業し、十一年が経ちました。

学生時代、今は廃止されました「会計科」に在籍し、週七単位の簿記三昧。放課後は生徒会活動や部活で残っている同期生徒とのおしゃべりに楽しんでいた日々をとても懐かしく感じております。

卒業後、幸い私は評議員を引き受けさせていただき、母校とも同窓会とも関わりを持つことができています。様々な業界の第一線で活躍されている大先輩にもご指導いただいております。

私自身は卒業してから福祉業界の仕事に携わっています。商業高校の学習には遠いものがあると思いがちですが、児童福祉施設で児童の学習指導をしています。

その中で総合学校に通う高校生に「簿記」の指導をしています。昨年、無事に全商3級に合格しました。過去には小学生に珠算を教えたこともありました。普段の事務作業に加えても非常に活用できます。進路指導の際にも商業は三年間で資格、ビジネス知識を養い、社会で即戦力となるスキルを身に着けられるものと確信し、指導にあたっています。

我が同窓会も若い世代の活動があまり盛んとはいえません。名簿ひとつの作成にしても、個人情報保護法などの普及で難しい状況です。ますます同期生同士の繋がりが希薄になってしまいます。我が

六十七期も卒業五年で同期会を企画・開催しましたが、住所変更などで連絡がつかない方が三割を超えていました。今年は卒業十二年、ひとめぐりを機に秋に同期会を開催する予定です。時が過ぎれば過ぎるほど、疎遠になってしまいます。私より若い世代の方にも定期的に同期会を開催し、繋がりをより濃いものにしてゆくべきだと思います。

ヤングOB会も七十期以降に会員がおりません。この会報を見て、OB会発展のお手伝いをして下さる会員が増えることを願っています。

三水会創立六十周年を迎える

第二十九期　土方敏之

築地市場の働く、都立第三商業高等学校卒業生の集まり、東京魚市場三水会は平成二十二年に創立六十周年を迎えました。

昭和二十五年に発足し、仲間を集めて第1回の会合を昭和二十七年五月十一日に人形町の「松美佐」で開催されました。そして昭和二十九年十月十一日に第二回会合を銀座「天狗」にて開催されました。第三回の会合は昭和三十二年一月二十一日に新富町の「大金」にて開催されました。

私は柳橋の料亭や新川の「増田家」が多かったと記憶しております。それから熱海の旅館や湯河原へ旅行したこともありました。

十五周年記念は新橋の第一ホテルにて昭和四十年十月十七日に開催いたしました。三水会は夫婦で参加する旅行も中央区の本栖湖寮を多く利用しました。子供が小さいときは家族単位で参加する行事も企画しました。

平成二十二年十月五日に芝浦インターコンチネンタルホテルにて、創立六十周年記念祝賀食事会を奥様同伴にて開催しました。これは会員も少なくなりましたので、記念式典等の堅苦しい行事はやめて、ゆったり寛いだ祝賀会にしようと、会場に過去に会で発行した記念誌や写真などをおいて、ゆっくり観て話をしたり、若い時の思い出ばなしをしたりしていただきたい、そして食事も余裕をもって召し上がって頂けるよう会場を広く前がひろがるようにお願いしました。

ロビーに集まった会員や奥様たちがにこやかに笑いながら会場に入られました。そして、軽く会釈して記念品の側に座られ観たり話をしたりして、食事の準備が整うのを待ちました。先ず集合写真の撮影から。藤枝会長を中心に奥様は前に座って頂き、後ろに旦那に立って貰いました。写す方も目がピントがよくあいません。加藤さんの進行に任せて開会、会長の祝辞、乾杯と……後は自由に楽しんで召し上がって頂けました。

そして二次会はホテルのバーで橋の夜景を観ながらゆっくり夜と六十年の歴史を語りながら音楽に酔いました。明けて新年の会も夫婦同伴の、神田「その田」で六十周年記念食事会を開催して奥様達から喜ばれました。優しい会員と良く合う奥様達の風が心地好かったです。

七十八期生と懇談会

第四十八期　渡邉秀明

三月五日(土)母校卒業式のあと、卒業生(七十八期)クラス代表十二名と同窓会役員とで、軽食をとりながら懇談会を開きました。

78期との記念撮影（同窓会寄贈の卒業証書入れ）

母校を卒業したばかりの七十八期生は、もらったばかりの卒業証書を広げて先輩方に見せたり、三年間の思い出や、今後の抱負や夢などを元気に語っていました。先輩方も後輩に負けずとばかり高校時代にもどり、思い出を熱く語っていました。

懇談会では、七十八期の評議員二名を選出し、クラス代表や同期生と連絡を密に取り合うことを確認してお開きとなりました。

昨年度に引き続き第二回目の懇談会でしたが、なごやかな中にも、同窓生の結束を強く感じられる楽しいひとときでした。

◆定時評議員会報告◆

平成二十三年五月十四日（土）午後五時より、母校都立三商会議室に於いて、平成二十二年度の年次定時評議員会が開催されました。

この日、前年に次いで母校会議室における二度目の開催地としました。同窓会の最高議決（意思決定）機関である「総会」と「評議員会」との云わば「二院制」を敷いた構成も定着しました。

議事の進行は会則にしたがい、事務局より、本日の出席者数が会則規定の定足数を満たしており、本会議の評決にあたっては会議成立の要件を満たしている旨の報告があった後、会則にしたがい、本日の出席評議員中より、小林慎典評議員（第二十八期）が本日の議長として選出され、議場の賛成を得たので直ちに議案の審議に入りました。

［本日付議された議案及び審議の経過］

第一号議案　平成二十二年度 事業報告承認の件

本件は、総務委員会を代表して、土方副会長より平成二十一年度の事業報告について詳細な報告があった。懸案の活性化活動（コーディネイト）の実績、加え、「同窓会マップ」の発刊も終えたこと等を含めて、議長が賛否を議場へ諮ったところ、多数の賛成を得たので、本議案は可決された。（否決者なし）

第二号議案　平成二十二年度 会計報告及び監査報告承認の件

本件は、渡邉会計担当理事より、予算額と執行額の内訳を勘定項目別に詳細に説明があった。

次いで監事を代表して古田監事より、監査結果が正確かつ適正であったことの監査報告がなされた。よって議長が本件の承認を議場に諮ったところ、多数の賛成を得たので本議案は可決された。（否決者なし）

第三号議案　理事、評議員補充選任の件

議長より、理事・評議員候補者の増員選任を諮るにつき、左記の候補者名を呼びあげた。

記

一、理事候補者

亀田八千代（第三十一期）

二、評議員候補者

平林　徳男（第二十六期）
大川　幹雄（第二十九期）
磯部　武男（第三十七期）
伊東　房恵（第四十九期）
千葉　俊幸（第五十四期）
宇都　英美（第五十四期）
佐藤　智美（第五十六期）
小林　　緑（第七十八期）
佐藤　姫定（第七十八期）

理事候補者一名、評議員候補者九名の計十名は、会則第十五条規定の補欠者の任期を引用することとして、他の役員任期満了予定（平成二十四年三月末日）までの一年間とし、再任は妨げないものとして、その賛否を諮ったところ、賛成多数（否決ゼロ）にて候補者全員の増員、選任が可決された。

第四号議案　平成二十三年度 事業計画案承認の件

本件は、杉本事務局長より本年度の事業計画案として、詳細に提案された。

殊に前年度に引続き、母校支援活動と共に同窓会活性化活動（同期会開催のコーディネイトに重点を置く）に鋭意務めることとして、事業計画案を議場へ諮ったところ、多数の賛成を得て（否決ゼロ）本件は承認可決された。

第五号議案　平成二十三年度 会計予算案承認の件

本件は、会計担当の渡邉監事より、前年度執行額と今年度予算額の数値比較及びその事由について詳細な説明がなされた後、議長が賛否を諮ったところ、絶対多数の賛成を得たので、本件は承認可決された。

［持寄り議題その他］

前年の評議員会において、「東京三商会」関連の運営状況を適時に開示することが提起されて以来、財団の原資、存在及び目的、さらには公益法人化移行申請手続き等、現状及び課題等に関しては、記述の通り、『関連法規』等の内容理解を深める目的で、定期勉強会の開催を継続して行いました。

その結果として、

①　公益法人制度（平成二十年十二月一日施行）に準拠した組織への移行申請の必要上、勉強会と同時並行して「移行認定スケジュール」を策定のうえ、他の動向を見つつ、早期に申請へ持ち込むべく手順に入ったこと。

②　公益目的事業の定義及び機関としてのガバナンスの構築等、課題が山積していたに拘わらず、東京三商会の役員会を背景からプッシュする形で遅滞なく申請手順を進行した結果、本年三月二日の認定審査会にて主務官庁（東京都教育委員会）から移行内定の通知を得ました。

③　この間の経緯につき、この日（評議員会の開催時刻前の午後一時より）全役員を招集のもとに、移行報告会を開催しました。

以上のごとく、質疑・報告並びに採決等が行われ、この日の評議員会の総ての議事が終了したので、閉会宣言が行われ、終了しました。

（審議終了時刻　午後五時四十分）

平成22年度会計報告及び23年度会計予算

（単位：円）

平成22年度　会計報告（平成22年４月１日～平成23年３月31日）			平成23年度　会計予算（平成23年４月１日～平成24年３月31日）		
項　目	22年度予算額	22年度執行額	項　目	23年度予算額	備　考
前年度繰越	10,237,148	10,237,148	前年度繰越	8,184,327	
（収入の部）			（収入の部）		
会費（７８期）	1,610,000	1,570,000	会費（７９期）	1,470,000	
運営協賛金	0	5,000	運営協賛金	0	
利息他	3,000	2,505	利息他	3,000	
収入合計	1,613,000	1,577,505	収入合計	1,473,000	
（支出の部）			（支出の部）		
理事・評議員会	200,000	349,102	理事・評議員会	300,000	
総会	200,000	58,000	総会	0	
新年会	50,000	32,416	新年会	100,000	
校歌祭	200,000	134,315	校歌祭	150,000	
同窓会報	400,000	612,392	同窓会報	400,000	
活性化活動費	1,400,000	1,664,419	活性化活動費	200,000	
母校部活支援	200,000	200,000	母校部活支援	200,000	
就職活動支援	100,000	95,605	就職活動支援	100,000	
母校支援	100,000	119,540	母校支援	100,000	
卒業証書入れ	120,000	97,497	卒業証書入れ	150,000	
会合費	200,000	55,000	会合費	50,000	
慶弔費	50,000	10,000	慶弔費	50,000	
通信費・事務費	60,000	2,040	通信費・事務費	30,000	
特別会計予算	200,000	200,000	特別会計予算	200,000	
支出合計	3,480,000	3,630,326	支出合計	2,030,000	
（繰越の部）			（繰越の部）		
前年度繰越	10,237,148	10,237,148	前年度繰越	8,184,327	
当期収入	1,613,000	1,577,505	当期収入	1,473,000	
当期支出	3,480,000	3,630,326	当期支出	2,030,000	
次年度繰越	8,370,148	8,184,327	次年度繰越	7,627,327	

平成22年度特別会計（周年記念事業）

前年度繰越	453,309
一般会計（７８期会費）	200,000
受取利息	212
収入合計	200,212
支出合計	0
差引次年度繰越	**653,521**

平成23年度特別会計（周年記念事業）

前年度繰越	653,521
一般会計（７９期会費）	200,000
受取利息	0
収入合計	200,000
支出合計	0
差引次年度繰越	**853,521**

会計　田端 彰　渡邊 秀明　監事　古田 勝一　辻井 正巳　三川 廣志

上記のとおり、報告いたします。　平成23年４月７日

本年度の事業計画

平成二十三年度　事　業　計　画

1　今年度も前年同様に、若い世代に同期会開催を働き掛けして、同窓会がこれらを援する。

2　「公益財団法人 東京三商会」の運営については、今後も注視していく。

3　母校とのかかわり、交流を深めるため同窓会関連の会議は母校にて開催する。

開催行事予定

①「三商同窓会報第五十号」の発刊

②第十九回 東京校歌祭への参加
（本年十月一日　詳細は下記に別掲）

③新年会　平成二十四年二月初旬開催予定

④活性化活動
同期会開催のコーディネートに重点を置く。
卒業式に同窓会より賞状を贈呈する。

⑤支援活動
母校支援
（部活動支援、就職活動支援その他）卒業証書入れ寄贈

⑥公益財団法人東京三商会については、逐次報告する。

平成22年度定時評議員会
平成23年５月14日（土）　都立三商会議室にて開催

共に名残や惜しむらん
卒業式に謡曲・鉢木
在校生と戦時中の三商
掛け合い

第十期　柴田榮一

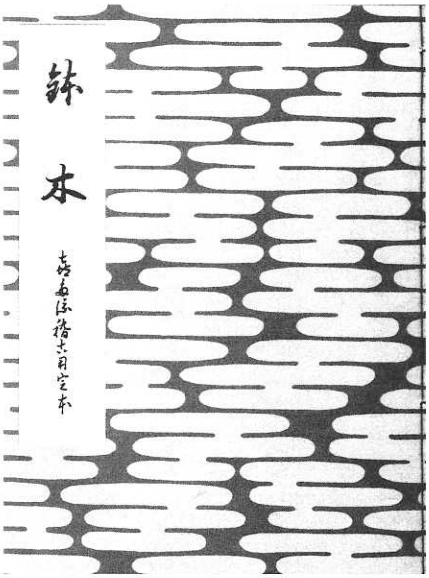
送られた2754人

卒業式の歌といえば「蛍の光」や「あおげば尊し」の唱歌が親しまれてきたものだが、私たちが学んだ戦時下の三商では「鉢木」なる謡曲が謡われた。「鉢木」という曲は、五年生が時の幕府の統領北条時頼の役、四年生が貧乏な鎌倉武士佐野源左衛門尉の役となり、微行中の上野の国の佐野の在で雪道に苦難する時頼に、源左衛門尉が虎の子の梅・桜・松の鉢の木をくべて暖を取り、送り出すという説話である。

この「鉢木」の朗詠は、第一期生の卒業式（昭和八年三月二十九日挙行）に始まり、第十一期生の卒業式（昭和十七年十二月挙行）まで、恒例として続いた。時は満州事変、日中戦争、太平洋戦争と悉く戦時中であり、それは取りも直さず昭和の日本が戦った「十五年戦争」下と重なる。この間、「鉢木」で送られた卒業生たちは、総数二千七百五十四人にのぼる。

朗々としていて雅びやかな響き、先輩と後輩の間の阿吽の呼吸。最後の「鉢木」を謡った十一期生たちの一人、八木隆は「歌の重さに深く感動を覚えたことを思いだす」と回想する。

注1　第十一期生の十二月に卒業式というのは、一期上の第十期生から、戦時特例で三カ月の繰り上げ卒業となったのに伴うもの。校内にも帝都防空のための陸軍の阻塞気球部隊が駐留するなど特異な雰囲気の中にあった、と当時の十一期・中島健作はいう。



株式会社喜多流刊行会・提供

盛儀「鉢木」は、斯くて次の昭和十八年十二月の第十二期生の卒業式から途絶えた。逼迫した戦争中の故と、当の十二期・吉岡鶴義もみる。

一方、昭和十四年卒・七期生の長坂源一郎（後に南山大学学長）が「私も四年生の時、五年生の時と二回「鉢木」を謡ったが、今でも耳に残る感動的な卒業式だった」と記しているように、嘗ての三商生たちは、送る側・送られる側として二度、「鉢木」の卒業式に連なっている。

くだって、『三商第十六期生の記録』で眞中康行は、――日銀三商会で、「鉢木」が誰からともなく譜本もなしに謡われだした。その席には一期生以下がおり、自分の在校中は謡曲はなくなっていたが、支店勤務時代に上司の勧めで観世流を習ったことがあり、先輩たちがこの曲の朗唱とともに卒業生を送り出したと聞いて、感激一入だった――との一文を寄せている。戦後混乱期の昭和二十三年三月、彼ら十六期生の卒業式では、戦前（事変下）・戦中と受け継がれてきた名曲「鉢木」も疾うに聞かれなくなっていた。

《連帯感、吟唱に乗せて》私たちが学んだその三商（東京府立第三商業学校、旧制中等学校として五年制、男子校）では昭和三年の開校以来、西洋音楽の授業はなくて謡曲の習得を課した。その吟声が東京湾頭の高空に朗々と流れたものだが、当時の教育としては珍しいことであった。学校から出掛けていって、幽玄な舞台能を見学したこともあった。

東京湾頭といったが、今はすっかり沖へ遠のいてしまい、校庭からの昔日の眺めが喪われてしまった。戦後臨海副都心の建設で遙か彼方にいってしまった海が、われわれのいた時分は校歌や応援歌にも「帝都の海の門にありて」「旭日洗う波かしら」と詠われたように、運動場のすぐ向こうにあって太平洋に通じていた。

同期会など今や頭に霜を置く昔日の三商生たちの寄り合いで、愛校心の発現である校歌とともに、いや校歌以上であるかも知れないが、誰もの口を衝いて出てくるのは、卒業式のハイライトであった謡曲「鉢木」の八段目「よしや身の・・」の場面であろう。

往時の吉澤徹校長（初代）流の商業学校教育で何といっても出色だったのは、和歌と謡曲の課業であろう。講師は和歌に三室戸敬光子爵、謡曲に松平銑之助子爵を迎えた。

和歌の三室戸子が旧公卿ならば、一方、謡曲の松平子は旧諸侯（上野国＝群馬県＝小幡藩主家）の後裔。小幡藩は譜代ながら禄高二萬石の小藩だったが、幕末期に藩主が若年寄を務めた功によって城主格（江戸時代、国持、准国持に次ぐ城郭を持った大名の格式）であった。

松平子については『華族大觀』（昭和十四年、同刊行會）に、「趣味として謡曲を好み」と紹介されているが、武家の出であるところから、諸流派のうちでも江戸幕府になって取り立てられた喜多流をよくしたものであろう。われわれが松平先生から教わったのも、武張った芸風を留めるとされる喜多流の謡であった。

謡にしろ能にせよ喜多流では、「鉢木」は初伝、つまり稽古順としては比較的初歩の段階に据えられている。松平先生が私たちに「鉢木」を採り上げられたのも、武士社会に取材した謡いやすい曲であったからなのであろう。

和歌、謡曲の修習といい、その講師の人選といい、吉澤校長の貴族趣味もあったが、商業学校という多少とも専科的な学校の生徒に、古典的、人文的な教養を帯びさせたいとする思いがあり、学校内には実際そうした香気が流れていたと思う。

そんなことで三商では昭和八年挙行の第一回卒業式以来、在校生の代表として四年生全員と、卒業してゆく五年生一同が謡曲「鉢木」の一節を謡って別れるのが恒例となっていた。式次第中に「惜別の曲」と掲げられたのである。清田榮一先生（後の第五代校長）は記念誌『五十年の歩み』で卒業式について、――特に注目を惹いた事は、送られる卒業生と送る在校生が謡曲「鉢木」を唱和応酬して別離を惜しんだもので、正に劇的シーンであった――と振り返っている。

私たち第十期生三百八人も、昭和十六年十二月二十八日「鉢木」に送られて、四年九カ月間馴れ親しんだ学び舎を後にした（期間が半端なのは戦時下の在学年限三カ月短縮措置のため）。対米英開戦したあの「十二月八日」から、まだ二十日後という騒然とした世の中であったが、「感激に頬を紅潮させ」云々と卒業記念写真帳は識している。

その十期の竹田一郎が「卒業式近く惜別の曲をリーダーたるべく放課後有志で練習中、用務員から握り飯の差し入れ。清田先生の心遣いとのことだった」と回顧している。清田先生は当時、竹田・筆者ら五年一組の学級担任であり、学年主任を兼務していた。「鉢木」は一、二年の時、習ったきりだったので、温習していたのであった。

《一曲の梗概》謡・能「鉢木」の粗筋というと――頃は、鎌倉中期。所は前段が上野国佐野、後段が相模国鎌倉である。

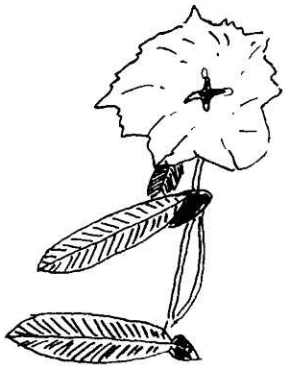
上野国佐野の武士佐野源左衛門尉常世（注2）は十二月のある大雪の夜、その侘び住まいに一人の旅僧を泊め、愛蔵の鉢植え、梅・桜・松を焚いてもてなす。そして、一族に領地を横領されて唯今は落魄れてはいるが、鎌倉にことある時は真先に馳せ参ずる覚悟だと話す。僧侶は前の鎌倉幕府執権（将軍の補佐役）最明寺入道（北条）時頼で、諸国遍歴中の世を忍ぶ姿であった。

時頼は後日、源左衛門尉を験すため関東八洲の軍勢に非常招集を掛ける。源左衛門尉は痩せ馬に鞭打ち錆びた薙刀を携えて駆けつけたので、時頼は言を違えず殊勝であると賞して、本来の所領である佐野の庄三十余郷を安堵したうえ、先の一夜の礼にと鉢の木にゆかりの加賀（注3）に梅田・越中に桜井・上野に松枝の三が庄を与えたという物語である。

注2　上野国佐野は、旧群馬県群馬郡佐野村。今は高崎市に編入。

注3　源左衛門尉に追増の地、梅田は現在の石川県河北郡、桜井は富山県下新川郡、松枝は群馬県碓氷郡松井田町の訛り。

佐野源左衛門尉常世の呼び名については「源左衛門尉」を単に「源左衛門」とし、また「常世」を「恆世」としたものもある。なお「尉」は、衛門府（京都御所の警衛に当たった官衙）の三等官。衛門府は守備範囲から左衛門府と右衛門府に分かれ、それぞれ左衛門尉、右衛門尉などと名乗った。さらに源左衛門尉とは、源氏の流れを汲む含意であったかも知れない。禁裏の衛士は諸国の武士から任じたので、如上のように見てくれば、源左衛門尉も故なしとしない。



片や当時の執権職は、時頼自身もそうしたように意に染まなければ将軍も更迭したほどの最高実力者。代々北条氏の世襲で時頼は五代目だが、その一族の専制政治体制が彼の時代に大方固まった。また臨済禅に帰依し、建長寺（後に鎌倉五山の第一）を創建、これも鎌倉のあじさい寺の俗称で知られる明月院にその墓所がある。後、元寇に遭遇した第八代執権時宗（通称、相模太郎）は時頼の子である。

《「いざ鎌倉」今に》能の「鉢木」は作者未詳（注4）だが、武士道礼讃の筋立てが時節柄、昭和戦前期まで世に好まれたようだ。大事の起きた場合を指す「いざ鎌倉」とか「すわ鎌倉」の慣用句は、源左衛門尉が政都・鎌倉に馳せ着けたこの「鉢木」に拠ったものである。

注4　一説に「鉢木」を能芸確立の祖とされる観阿弥、世阿弥父子いずれかの作とし、とすれば南北朝期から室町前期の所産ということになり、演歴も古い部類に属する。現に岩波文庫『謡曲選集』（野上豊一郎編）は、「鉢木」を「観阿彌・作」とする。

北条時頼の下情巡察の故事は『増鏡』『太平記』『北条九代記』などの歴史軍記物語中にも見えるが、佐野源左衛門尉絡みの話は出てこない。「鉢木」そのものはフィクションであると見るべきで、後の水戸黄門漫遊記の原型ともされる。黄門の場合もそうだが、時頼も（「泣く子と地頭には勝てぬ」の）地頭の恣意的な在地支配を抑制した農民庇護の姿勢などが人望を得て、これが後に民情視察の廻国伝説を生んだものといわれる。それかあらぬか「鉢木」の胸がすくような結末は、黄門漫遊記の展開と同一手法なのである。時頼は競合勢力を次々に退けて一門の権勢を揺るがぬものとした武断政治の一方、困窮した御家人（注5）や土着民対策などが仁政と謳われ、評価を分けるのである。

注5　御家人とは将軍直参。佐野源左衛門尉も御家人とされる。

源頼朝が征夷大将軍となって以来の武家政治の発祥地、その「いざ鎌倉」での大団円の場面だが、着到した大名小名が綺羅星のように居並ぶなか、時頼は最も見すぼらしい武者を召し出せと従者に命ずる。従者の旨を受けた下人から、ご前へ出よと告げられた源左衛門尉は、その千切れた具足に諸侍が目配せをして笑い合うなかを、悪びれた気色もなく進み出る。そして思いもかけず時頼自筆の知行証状を

拝し、喜び勇んで故郷に帰ってゆく。

強者どもが鎌倉入りの荘重な場に、見る影もない源左衛門尉を配し、結局はそれが華々しくカムバックを果たすという劇的な解決は、日本人の好みに叶ったものなのであろう。

「鉢木」はまた江戸時代歌舞伎化や人形浄瑠璃化されて「鉢の木物」と総称され、その幾つかの外題が当たりを取っている。また一中節にも採り入れられ「鉢の木」の曲が今に残る（他に「道成寺」「景清」など謡曲に題材を求めた一中節が少なくない）。

《面をかぶらぬ素顔で》能としての「鉢木」は、舞の部分を欠く台詞劇である。また能舞台には多く女性、翁や神佛、鬼、幽霊などが能面をかけて登場する仮面劇だが、「鉢木」は直面物といって現実の男性を主人公とし、仮面をつけず素顔のまま演ずる点で特異だ。

平成二十一年十二月、米寿を迎えて「鉢木」を演じた宝生流シテ方能楽師今井泰男が、面を付けない直面について――顔の表情、目線の位置などに持続的な緊張が要求される。「不作為の作為」と「作為の不作為」を混然とさせる力量が必要で、演者の人生がしみ出す――と語っている（同年十一月二十七日朝日新聞夕刊）。

《校長の墓前にゆかりの曲》三商の卒業式では四年生が佐野源左衛門尉（シテ＝主役）、卒業生が北条時頼（ワキ＝相手役）で、雪の翌日、時頼が立ち去る時の別離の情を、ロンギで謡ったものだ。

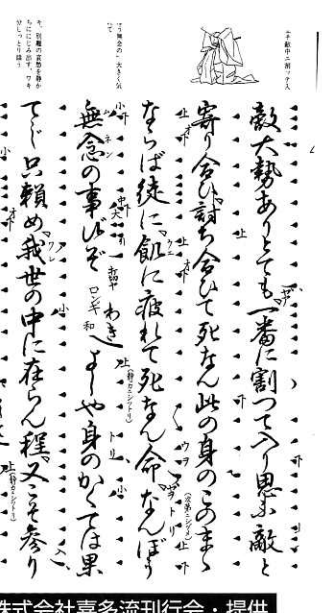
ロンギとは、論議。シテとワキ、あるいはシテと地謡（時にワキの代弁としての）が交互に謡う掛け合い台詞の部分である。「よしや身の、かくては果てじ、ただ頼め、…」と、その詞章も流麗な七五調となるくだりだ。ワキ「暇申して」シテ「御出でか」（どうしてもお立ちですか）ワキ「さらばよ常世」シテ「又お入り」（またお越しください）と経て、「共に名残や惜しむらん、共に名残や惜しむらん」で結ぶこの一節は、文字数にして僅か二百八十字足らずだが、誠に別れの場面に相応しいしみじみとした遣り取りである。

並べて能には喜怒哀楽の様々な感情が籠められていて、人間的な側面があらわであり、時代を超えて後世に通じるものがあるとされる。ほぼ四分の三世紀前、卒業式に錦上花を添えた「よしや身の」から「共に名残や惜しむらん」までの箇所は、この曲の所演時間一時間余からすれば高々数分間、全曲十二の段（能の構成単位）のうちの一段に過ぎないが、私たちには終生耳朶から離れることがないのである。

恩師の一人、高橋昇一先生は平成四年二月二十三日、東京・多磨墓地での吉澤校長墓参会に栃木県下から上京、墓前で卒業生らによって「鉢木」が謡われたのに感銘して帰郷後、臨書し「日儔老人心血を注いだ会心の思い出作となりましょう」と条幅に仕上げたその写真を『十期会報』誌上に寄せた。この日の墓参会からの帰途、微醺の先生は皆とはぐれてしまい、電車の車中で独り「鉢木」を口ずさみ「五十余年前の色々な思い出を辿り辿り只々感無量」であったと、記している。

それより前、昭和四十六年の吉澤校長墓参会には嘗ての松平銑之助師も参加し、追悼の「鉢木」を墓前に捧げた。『創立70周年記念誌』には、同先生が昭和十五年三月（判読）卒業生のために筆を執った「鉢木」の書が掲載されている。

《別離の場面の謡と解釈》「鉢木」の曲は前記のように、前半（上野国佐野）と後半（相模国鎌倉）とから成るが、「よしや身の」以下の時頼と源左衛門尉の問答は前半の最後の部分に当たる。



株式会社喜多流刊行会・提供

三商の卒業式で遣り取りされたその部分と、それの含意とするところは次のようなものである。

【時頼】よしや身のかくては果てじ只頼め、我世の中に在らん程、又こそ参り候はめ、暇申して出づるなり

＝（前の七段目の終わり、「一旦大事があれば鎌倉に赴き、討ち死にをと心に決めているわが身が、このまま過ぎればただ飢え疲れて死んでしまうだけだろうと思うと、まことに以て残念至極です」との源左衛門尉の微衷の披瀝を受けて）いえいえ、あなたが今のまま果ててしまうなどとは思われません。どうか私を頼りに思ってください。私が生ある限りは、また伺いましょう。それでは、これでお暇します。

【源左衛門尉】名残惜しの御事や、初は包む我が宿の、さも見苦しく候へど、暫しは留り給へや

＝このままお別れするのが、何とつらいことか。初めはみっともないのを隠そうとしてお泊めするのをお断りしたほどのわが家ですが、もう暫くご滞在ください

【時頼】留る名残のまゝならば、さていづくにか雪の日の

＝名残惜しいままに足を留めていたら、雪のたびに同じことを繰り返し、一人旅が捗りません。

【源左衛門尉】空さへ寒き此の暮に

＝旅の空は冷え冷えとしているのに、今日の暮れ方は

【時頼】いづくに宿を狩衣

＝さて、どこに宿を借りたものか

【源左衛門尉】今日ばかり留り給へや

＝もう一日、今日だけはお泊まりください

【時頼】名残は宿に留れども、暇申して

＝お名残惜しいのは重々だが、お暇を申して

【源左衛門尉】御出でか

＝どうあっても、お立ちですか

【時頼】さらばよ常世

＝さらばじゃ、常世よ
【源左衛門尉】又お入り
＝また、おいでください。
【地謡】自然鎌倉にお上りあらば、お訪ねあれ、興がる法師なり、かひがひしくは無けれども、披露の縁になり申さん、御沙汰捨てさせ給ふなと、云ひ捨て、、出船の、共に名残や惜しむらん、共に名残や惜しむらん

＝「もし鎌倉においでの節は、お尋ねください。酔狂な坊主です。何とも頼り無げだが、（あなたが一族に領地を横領された件は）幕府に申し立てる手引きをして差し上げましょう。訴訟を断念せず、お上の裁きに望みを託していてください」と、みずからの身分は明かさぬまま言いっぱなしの時頼だが、さあ出立というわけで、源左衛門尉と時頼の二人はいま共々名残を惜しんでいるのであろう。

この「地謡」というのは曲の進行につれて、シテやワキの心の内や状況説明をするいわば劇中のバックコーラスである。その謡い手は始めから舞台に着座しているが、卒業式場はシテとワキだけなので、便宜上、この部分はシテ・ワキが一緒に謡う両吟となったのではないか。

《源左衛門尉に遅疑逡巡》「鉢木」の曲は全体の話の運びこそ単純なようだが、中心人物たる佐野源左衛門尉の心には微妙な揺れがあって、それらが随所に巧みに描き出されている。また藤原定家の名歌への仮託、掛詞などの修辞法等、文学作品としても尤物たるを失わない。なお、この能にはシテヅレ（ツレとも略す助演的な役）として、佐野源左衛門尉の妻が顔を出す。まず源左衛門尉だが一夜の宿をという行脚僧の頼みを、見苦しい住みかだからと一旦は断る。が妻の「私たちがこうして零落しているのも、先世での戒行が拙かったせいでしょう。せめてこのような修行僧と佛縁を結んでこそ、後の世に安泰を得るよるべにもなるはずです」という言を容れて、僧を連れ戻るのである。

源左衛門尉はこの時、定家[注6]の「駒とめて袖打ち払ふ蔭もなし佐野の渡りの雪の夕暮」（馬を止めて、袖に降りかかった雪を払う物陰とてない、この佐野の辺りの雪の夕暮れよ）という歌を引き合いに出して、客僧を請じ入れる。定家の歌は大和国三輪山近くの佐野での情景を詠んだのだが、源左衛門尉は「当地は地名は同じだが東国の佐野で、その佐野の付近で雪の暮れ方にさぞ難渋されたでしょう」と袖に手をかけて引き留める。

源左衛門尉は招き入れた僧に粟の飯を勧め、秘蔵の盆栽を薪にして暖を振る舞うのだが、この時も年月手をかけてきた枝を砕くのに、なんとしたものだろうかと暫しはためらうのである。僧はあるじの志に感じ入り苗字を問うが、始めは「名もなき者」と答えず、なお促されて遂に「かように落魄れた身」と、そのいきさつとともに名乗るのである。

注6　藤原定家の「駒とめて・・」の歌は『新古今集』巻第六冬歌に出て来るが、実は万葉集巻三「苦しくも降りくる雨か三輪が崎佐野の渡りに家もあらなくに」の本歌取りなのである。本歌取りは、和歌や俳諧の世界で先人の作中の字句や発想を意識して取り込み詠んだもの。もとうたの「苦しくも・・」のほうは大和朝の宮廷歌人、長忌寸奥麻呂の作で、斎藤茂吉も『万葉秀歌』（岩波新書）のなかで取り上げている。藤原定家は本歌取りの名手とされ、上掲の歌は殊に有名。

さて物語だが前段の雪中の一軒家から、後段は転じて鎌倉の幕府陣営。源左衛門尉は下人から時頼の座前へ畏まれと告げられて、「人違いであろう」と拒むが「指示されたような貧相な侍はほかにないから」といわれ、「自分を謀叛人に仕立てて首を刎ねるのでは」と半ば覚悟する。それが、先祖伝来の失地の回復に加増の沙汰というどんでん返しで、喜色満面の帰国となるわけだ。

《げに旅は情け、人は心》ここで今一度、筋の展開や人物関係をお浚いしてみよう。

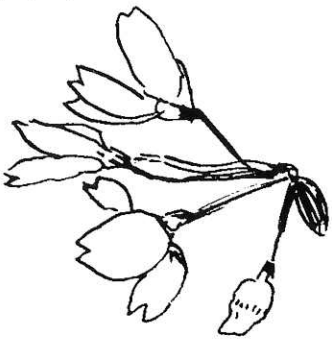
上洲在の佐野源左衛門尉、ある雪降る夜、お忍びの先の執権北条時頼に宿を貸し、丹精の植木を燃やして暖をもてなす。また「いでや鎌倉となれば一番に参上」との心中吐露に、時頼は後に陣触れを出して試すが、言に違わず参着。源左衛門尉は酬われて、本領安堵を果たす。武士が擡頭した鎌倉時代、その鑑として「鉢木」は描かれた。

舞台には、まず北条時頼が「行くへ定めぬ道なれば、行くへ定めぬ道なれば、来し方もいづくなるらん」（目的地も決めていない旅なので、どっちの方向から来たかもよくは覚えていないことだ）と、僧形で登場する。次いで、佐野源左衛門尉が「ああ降つたる雪かな」との独白とともに空を見上げながら現れ、深閑たる雪景色がその境涯を一変させるという全編の伏線[注7]を張る。

注7　前記、米寿で「鉢木」を演じた能楽師今井泰男が、「出だしの『ああ降つたる雪かな』の表現が難しい。寒い時だから牡丹雪ではなく、しんしんと降り、深々と積もった雪を観客に感じさせないといけない」という。

やがて一夜の宿となり、尾羽打ち枯らしていても、人間の温か味は雪夜に焚かれた火色にも似て、さすらいの旅の僧との間に連帯感が深まる。そして一旦緩急あればの、もののふたるの意気地。時頼は雪深い山里に、源左衛門尉という廉直な草莽の臣を見出した。それにしても一人の忠義立てを確かめるために、東八箇国の全軍に参集を触れる荒唐無稽さも残る。

平成十四年一月五日、ＮＨＫテレビで放送された浪曲「鉢の木」（口演・五月一朗）では、▽雪の夜の時頼は供でも伴っていたのか二人連れの出家姿であった（あれだけの身分の人物が一人旅というのも確かに不自然）▽年が明けて鎌倉集結が下知されたのは正元元年（一二五九）春のこと▽時頼は恩寵を謝して退下する源左衛門に「糟糠の妻を労れよ」と諭す、といった脚色がされていた。曲は、関西浪曲界の総帥三代



吉田奈良丸の得意とする演目の一つであった。

ところで、アラブ社会に「いかなる旅人も一夜を請うたら泊める」という俚諺があるそうだ。南米ペルーの政権が崩壊し東京滞在中の日系人、フジモリ前大統領に、自宅を提供した作家曽野綾子が、その気持ちとして記者会見で紹介した（平成十二年十一月）。

わが国に伝わる民話や昔話にも、難儀している客を温かく迎えると福を授かるというタイプのものが各地にある。例えば「正月神さん」。雪の大晦日、とある老夫婦の家へ貧しい格好をした七人連れの旅の衆が傘を借りに立ち寄る。傘が足りず、蓑や雨合羽まで着せてやる。翌年の大晦日「今年も餅の用意も出来んのう」「でも二人揃ってお正月が迎えられて何よりですよ」と話していると、去年の旅人たちがまた訪れ「わしら正月の神だ。雨具の礼に来た」と打出の小槌を振って、搗きたての餅や酒、鯛、晴れ着を次々と出してくれる。そのうえ爺さん婆さんを若返りさせてくれ、二人は元気で働いて子どもも儲けたというもの。「笠地蔵」なども同じパターンだ。

《終生忘れ得ぬ感激》謡はリトル・ジェントルマン教育を掲げた吉澤校長が、その一環として実社会に出てからの身だしなみにと、正規の授業に採り入れた。「実業界に出る三商生は、上流の人の知己を得ることが大事だ。それには貴顕紳士の嗜みを習得し、教養として身につけておき、話題を共にし得べきことだとの校長の持論による」（二期・橘川達郎）。そういえば我々十期生も校外授業に芝の青松寺へ赴き、只管打坐（ひたすら坐禅すること）を専らとする曹洞禅に参禅したこともある。精進料理に与かり、その食事作法を学んだ。「命には終りあり、能には果てあるべからず」（世阿弥）。謡や禅を通じて、文化の香りに触れ得たのは、人生にどれほど潤いをもたらしたことか、測り知れないものがある。

そして、謡い合った卒業式での送別の曲。それは四期（昭和十一年卒業）登内実が「正に圧巻であった」というように、卒業生、在校生にとって何物にも代え難い留別の辞、壮行の辞として、生涯忘れ難い感動を残したのである。

當舎利夫が嘗ての『十期会報』特集の「古稀と戦後五十年・記念随想」の書き出しに、「出船の、共に名残や惜しむらん、共に名残や惜しむらん」――「鉢木」の謡曲で送られ、卒業して五十四年云々と、感慨を寄せている。学び舎を巣立って遙かな歳月となるのに、「鉢木」の詠唱は今もって私たちの心の原点であり、特別の思いが籠もっているのである。

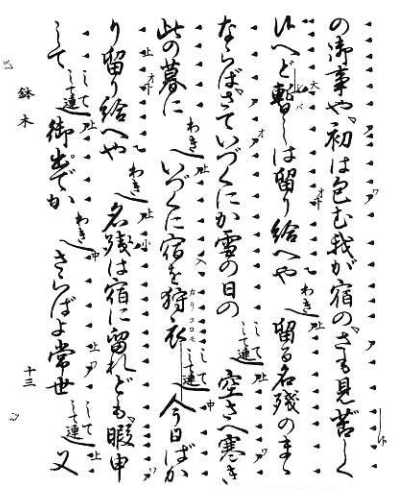
第一期生を送り出す三商初の卒業式が挙行された昭和八年三月といえば、一月にはナチスを率いるヒトラーがドイツの全権を掌握、二月には関東軍が熱河省へ侵攻して満州事変は拡大、日本は撤兵を求める勧告案可決に対抗して国際連盟を脱退、洋の東西で第二次大戦への歴史の歯車が大きく回転した。また最後の「鉢木」朗唱となった第十一期生の卒業式が行われた昭和十七年は、ミッドウェー海戦でわが連合艦隊が大敗を喫し、太平洋戦争開戦以来の優勢が逆転する戦況の転換点となった。

あるいは世界中が暗雲に覆われ、またわが国をめぐる戦局が急迫するなかで、迎えた卒業式。卒業生たちの中には、己がじし就職・家業・進学と前途もさることながら、いずれ戦野に赴くことになるであろうわが身や、残される一家眷属の上に早、思いを馳せる者があったかも知れない。あるいはまた、苦楽を共にした異色の三商生活の数々を思い返して、母校と後輩たちの平安を祈ったかも知れない。いずれにせよ、戦時下の卒業式で「共に名残や惜しむらん」と謡った各自の胸中に、万感の思いが去来したであろうことか想像される。

なお一期生から五期生（昭和十二年卒業）までは、卒業式後タクシーを連ねて帝国ホテルで、学校主催の祝賀晩餐会に臨んだ。やはりリトル・ジェントルマン育成の方針からのテーブル・マナーの習熟を兼ねたものであった。昭和十五年卒業の八期生は平成二年、嘗て出来なかった帝国ホテルで卒業五十周年祝賀会を挙行している。更に私たち十期生は異例の戦時下三カ月繰り上げ卒業となって急遽、年末（昭和十六年）に卒業式を挙げ、鍋汁を作って体育館で祝賀会を催すなど、卒業行事にも時代色が窺われる。

三商を離れてからも謡曲・能の研鑽を積み、その道を深めた者が少なくない。二期生は卒業（昭和九年）後、同期会とは別に喜多流謡曲の会「欣謡会」を持つ。「少年の日の記憶は、去らない。このお蔭でどんな席に出ても驚かないし、話題も豊富になり、覚え込んだ謡の中の名言名句は常に脳裡にある。どれ程役に立っていることであろうか」と橘川達郎。或る者は大銀行の重役にまでなったが、喜多流のシテとして国立能楽堂に演じた程になったという。十期の戸張久雄は、会社に同好会があり人間国宝宝生弥一に師事、安倍能成と対で「井筒」を謡ったのは今も深い想い出と振り返る。「謡は取っ付きは悪いが、流麗な文章と独特な謡い回しで古の幻想に浸れ、憂さを忘れ得るから止められない」と効用を説く。十一期の鈴木満は――松平先生の謡曲など、他の学校にない異色の教えを受けた。のちに中央大学能楽研究会に席を置いたり、結婚式の仲人で「高砂」を謡ったりしたのも、吉澤校長なかりせばのことであった――と懐かしむ。

《まこと言霊の幸う国》「鉢木」の物語自体が虚構だが、辞書『広辞苑』（第五版）の解説にも、「鉢木」からの引例が意外とある。例えば「鉢木」導入部の「これは一所不住の沙門にて候」――それがしは漂泊の僧との時頼の出だしの名乗りだが、『広辞苑』で「これ」「一所不住」の箇所を引くと、この時頼の言葉が用例に挙げられている。その他源左衛門尉絡みだが、「ああ降つたる雪かな」の「ああ」、それに続く「袂も朽ちて袖狭き細布衣、陸奥の今日の寒さをいかにせん」――袂も崩れ、袖も狭い細布で作った衣で、雪の日のこの寒さに耐え兼ねているの「細布衣」、前掲七段目の終わりのところで「なんぼう無念のことざうぞ」――全く以て無念千万ですの「な



株式会社喜多流刊行会・提供

んぼう」（どんなにか、の意）などがそうである。『広辞苑』がこれらを古典中からの典拠として掲げているのは、「鉢木」が清節、気魄などもののふの神髄を描いて、国文学として一定の評価を得ている所以であろう。

先に舞台上の情景を導き出す序詞として、古歌などを台詞に詠み込む例を挙げたが、いま少し実際に見てみよう。

今も我々の胸中を去来する「よしや身のかくては果てじ只頼め……」の謡いだしだが、ここで時頼が「只頼め」と源左衛門尉に言ったのは、清水観音[注8]が詠んだと伝える御歌からの転用である。歌は「なほ頼めしめぢが原のさせも草わが世の中にあらん限りは」というもので、新古今和歌集[注9]・巻第二十に出てくる。この歌の由来について、平安末期の歌学書・袋草紙[注10]に「もの思ひける女の、はかばかしかるまじくは、死なむと申しけるに、示し給ひける」（思い悩む女が、思わしいほうにいかないようなら、死んだほうがよい、というのを、戒められた）もの、との注釈が載っている。

注8　清水観音は、京都清水寺の本尊たる十一面千手観音立像。

注9　新古今集・巻第二十の巻名は、釈教歌。釈教は釈迦、即ち佛の教え。釈教歌は広く佛教に関する六十三首を収めているが、その巻頭に「なほ頼め」の歌は据えられている。

注10　袋草紙は、歌に関する故実、逸話などを編纂。著者は、藤原清輔。

歌に出てくる「しめぢ（標茅）が原」は、栃木市北方の伊吹山麓。また「させもぐさ（指艾）」はこの原に成った蓬で、「しめぢが原」が「させもぐさ」の歌枕として配されている。歌のうえでは「させも」に、「そのようにも」との意味の「さしも」を効かせて、ここは「さしもありとても」つまり「そのように悩み苦しむとも」とするのである。そこで、歌意は「只管私を頼りにしなさい、たとえ貴方が憂え煩おうとも。私がこの世にいるであろう限りは」となる。なお蓬が成長して灸のもぐさとなるところから、これを心労で患うばかりのおなごへの療治の歌として含味すれば、慈悲深い観世音菩薩の前面さえ髣髴としようというものである。

和歌の出だしの「なほ頼め」が「鉢木」で「只頼め」となっているのは、後に鎌倉中期に編まれた佛教説話集・沙石集[注11] 巻五で、この歌が「ただ頼めしめぢが原のさしも草われ世の中にあらん限りは」との形で伝承され、それを謡曲が引用したのである。

注11　沙石集は、僧・無住一円が庶民教化のため著した。「一心を得る初の浅き方便、和歌に如くはなし」とし、和歌説話も多い。

更に敷衍すれば、後の世、この歌から「させもぐさ」が、佛によって救われるべき生物どもを広く表す語とされるようになった。一首の趣意は「一途に私を信頼せよ、悩める一切衆生たちよ、どんなに辛いことがあろうとも、私が現世で衆生済度の本願を持する限りは」と説きかけ、偶々一人の某女に諭した本来の歌に比べ、あまねく闇を照らす普遍性を獲得することとなるのである。

このように曲中に出てくる一言でも、その内に深遠な由来を蔵しているのである。また時空を超えて、互いに緊密な連関を持つのが言語なのである。ここに挙げた時頼の「只頼め」は、その一例に過ぎない。「鉢木」を繙けば、そうした奥深い背景が随所に鏤められているのが判る。この謡曲が、文芸としてもすぐれていることの証左であろう。

その他、一々詳述は省くが、源左衛門尉は薪の火を扇であおぎながら、時頼に「御垣守衛士の焚く火はお為なり、よく寄りてあたり給へや」と、囲炉裏になお膝を進めるよう勧める。これは小倉百人一首にも採られた神職・大中臣能宣[注12]の「御垣守衛士のたく火の夜は燃え昼は消えつゝ物をこそ思へ」――御所の門を警護する兵士たちの焚く篝火が、夜は赤々と燃え上がるものの、昼は消えている。あなたを思う私の心もまた、夜は情熱に燃え、昼間は身も消え入らんほどに、苦しい恋の思いに悩む明け暮れが続いている――という詠歌があるのを念頭に、「鉢木」では修辞上「御垣守衛士の」を「焚く火」の前置きに援用したものである。

注12　大中臣能宣は伊勢神宮の祭主を勤めたが、歌人としても評価が高く、三十六歌仙の一人。

また「よしや身の――」に続く一節中の「いづくに宿を狩衣」の「狩」は、「（宿を）借り」に引っ掛けたもの。おおもとは、古く伊勢物語[注13]の百十四段に出てくる元・鷹飼いの老人の歌「翁さび人なとがめそ狩衣けふばかりとぞ田鶴も鳴くなる」――年寄りの私が狩衣を着るのを、人々よお咎めくださるな。それを身につけるのも今日が最後と、鶴も鳴いているようです――の「狩衣」に拠った文飾である。

注13　伊勢物語は平安時代の歌物語。作者未詳のうえ、在原業平（歌仙・三十六歌仙の一人。「世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」の一首で名高い）が物語の主人公と混同されるなど、その成立は今もって複雑。

「鉢木」はまた、異邦の詩歌をも自家薬籠中のものとする。源左衛門尉が時頼より遅れて雪路の舞台に姿を現す第一声の中で、中唐の詩人・白楽天の詩を引いているのである。

それは「雪は鵝毛に似て飛んで散亂し、人は鶴氅を被て立って、徘徊す」――雪はまるで白い鵝鳥の羽が散乱するかのように降り乱れ、人は恰も鶴の羽毛で作った衣を着たような真白な姿で雪の中を歩き回る、というもの。それに引き比べ、粗末な古着で寒気を耐え忍んでいるわが身。「あら面白からずの雪の日やな」と、源左衛門尉は嘆くのである。

注14　源左衛門尉の粗末な古着とは、前掲『広辞苑』の用語解説が引例の「細布衣」を指す。

武家時代の粋美を描いた「鉢木」だが、日中王朝文学の詞藻を内奥に秘めて、その奥行きは深い。

《「羽衣」なども習う》わが国の四季の眺めを象徴的に「雪月花」というが、雪の能は月や花に比して以外に数少なく、名が通ったのは「鉢木」と「葛城」ぐらいのものであるらしい。

「葛城」という能は、大和の国葛城山の女神がそこに住む役行者に呪縛されて久しいが、雪の降りしきる山中、出羽の国羽黒山から来た山伏の夜を徹した祈祷で解き放されるという物語。古くは、雪葛城といった曲。深沈とした夢幻の雪世界に遊ぶ能が些かとは、意外な感じがしなくもない。

ところで謡曲の授業については、年によって多少の違いはあったろうが、「松平子爵は毎週来校され、丁寧に演練指導された」と二期・橘川達郎。松平先生からは「鉢木」だけでなく幾つかの曲を習ったと思うが、卒業生たちの回顧録中には「羽衣」と「東北」が出てくる。

「羽衣」は、駿河の国三保の松原で漁師白龍が松の枝に掛かった美しい衣を見つけたのを、天女が返して貰い、返礼にその衣を纏って舞を舞い、やがて彼方の富士山に舞い上がり消えていったという羽衣伝説を脚色したもの。舞わずに帰ってしまうのではという白龍が、「疑いは人間にあり、天に偽りなきものを」と天女の返す言葉に、心を動かされる教訓の場面も。

「東北」という能は、京都の寺院、東北院を訪れた関東の旅僧が、ひともとの盛りの梅を愛でるが、これが平安の歌人和泉式部が植えた軒端梅と知り、夜もすがら供養の読経をする。やがて、式部が在りし日の上臈姿で現れ、昔話と舞を舞って消え、僧が目覚めると梅の香が馥郁と漂っていた、という情趣に富んだ能らしい能の一つ。古称、「軒端梅」とも呼ぶ。

《三商教育の源流と精華》昭和三年が三商の創立だが、その前年・昭和二年に日本の金融恐慌、翌々昭和四年アメリカに始まった世界恐慌と、挟み打ちに遇い、折りから封切られた映画「大学は出たけれど」が流行語となる未曾有の大量失業時代に遭遇した。一商の教頭から三商の初代校長に赴任した吉澤先生は着任早々、前途に大きな危機感を持ったに違いない。

この点、先生は「新設校の校長として短年月のうちに、時代が求める人材の育成と輩出の実を挙げ、〃ここに三商あり〃と世間を注目させた」と、十一期・中島健作はいう。下町の商家に育った生徒たちは利に聡く、これに商業専門の教育を施しても、当用の小ぶりの人間しか育たない。ここは品格の練成が肝要と、吉澤校長は当時破天荒ともいえる教養課目を導入した、とみる。

明治の人であった校長は、打算のない気概とでもいえる武士道を「鉢木」に求め、卒業式におけるその唱和は、仕上げの授業であるとともに、卒業生にとって誓いの言葉に代わるものであった、と中島は捉える。

中島らの十一期生は、僅か一年足らずとはいえ、多感な少年期に吉澤校長から直接薫陶を受けた最後の期である。謡曲も正課として履修し、「鉢木」に抱く感懐に先輩の期と共有するものが少なからずある、とする。「鉢木」を焦点に記憶を掘り起こすと、三商教育の源流と精華が見えてくる、と中島は顧みる。

注15　十一期生は昭和十三年四月入学、翌十四年二月吉澤校長が死去した。

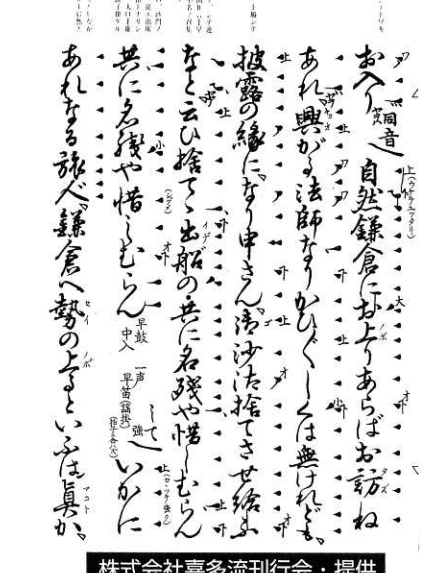
《延々、師弟の堅い絆》われわれは今、吉澤校長を偲ぶ墓参会（多磨墓地）が卒業生らによって、半世紀を越え続いたことを、改めて思い起こす。

同墓参会は、吉澤校長が他界（全校生徒耐寒早朝駆け足訓練を率先指導して、病を得、死去）した昭和十四年の翌年から、戦中戦後の動乱・窮乏期を経て、一年も中断することなく、五十六回忌まで続いた。その生誕百二十年に当たる平成六年二月二十七日、祥月命日を卜して最後の墓前会を行ったが、参会者の高齢化に伴う健康上の問題という事情からであった。早くから墓参会の運営に当たってきた一人の十期・福田猛は、これを「和漢洋に通じた吉澤校長の教えが、永く卒業生の処世に役立っており、今も幅広い支持共鳴を得ている」明かしとみる。

この間、墓参四十年を報じた朝日新聞東京版（昭和五十六年二月十九日）の記事は――墓参りは、十一年間「リトル・ジェントルマンをつくる三商教育」を掲げて、独特な教育方針を貫いた吉澤校長を知る一期から十一期の教え子を中心に続けられ、往時の少年たちに強烈な印象を与えた明治の教育者の気骨は、いまだに脈々と生きている、と結んだ。

《劇的な決着》本稿では「鉢木」以外の曲にも幾つか触れてきたが、それらをご覧になってお気付きのように、能という芸能は元々、場所との結びつきが緊密だ。「鉢木」でも、佐野と鎌倉という土地は動かぬ。その白皚々雪に埋もれた陋屋から、時ならぬ兵馬呼集のいくさ場へと、立場こそ入れ替わるが、北条時頼と佐野源左衛門尉という主客、主従の二人に通う温情。「鉢木」は、発端と結末の照応の妙を極めた名作というべきであろう。

そこには日本人なら、どこか心の底に持ち続けているサムライの魂、もののふの道がある。旧制中学にはてんでんに個性豊かな校風があったものだが、あれこれ思い及べば、端正な三商の気風も由なしと



株式会社喜多流刊行会・提供

しない。

また総じて能には、曲全体を前半分と後半分に分けた二場物が多い。「鉢木」の場合、それは目を見張るばかりの事態の急展開、といった構造的な効果を挙げている。それと時節だが、第一場こそ雪降りが決定的要因だが、第二場は最早時候に関わりない。ただ第二場は第一場から数カ月後とする説も見え、曲中の字句からは確かめ難いものの、突然の動員の大号令。その手続き、伝達に掛かる時日などを考えれば、季節が一回転しているであろうとは頷ける。

《世界無形遺産の第一号に》能楽（Nogaku Theatre）が、「世界共通の宝」になった。平成十三年五月十八日、ユネスコ（国連教育科学文化機関）が創設した「人類の口承及び無形遺産の傑作」と宣言した十九件のうちに挙げられたのである。

注16　シテ方観世流能楽師観世榮夫の感慨。一時、能界を離れ、現代演劇、映画、舞踊などに演出、出演する活躍をした。故人。

いわゆる「世界遺産」の無形文化財版。わが国を代表する伝統芸能として日本政府が推したものだが、能楽に続いて、第二回宣言（同十五年）で人形浄瑠璃文楽、第三回宣言（同十七年）で歌舞伎がそれぞれ指定された。現在は、同十八年に発効したユネスコの「無形文化遺産保護条約」に統合されている。

《脱皮と同化と》押し並べて「孤高の芸術」ともいえる独自の道を歩んできた能はいま、世阿弥以来未曾有の盛況を呈しているといわれる。そうしたなか、平成二十二年はかのチェーホフ生誕百五十年に当たり、その四大戯曲「かもめ」「桜の園」「三人姉妹」「ワーニャ伯父さん」を現代能として上演する国際的な取り組みもみえる。

注17　「現代能楽集チェーホフ」。九月東京・東池袋で、社会派演劇「燐光群」坂手洋二の作・演出。

その一方では、能それ自体の現代化への試みとして、野村萬斎企画のシリーズ「現代能楽集」が同年その五作目を上演した。

注18　能「弱法師」「俊寛」「綾の鼓」を現代演劇に脚本化した三部構成。十一月東京・世田谷パブリックシアターで。

内からは能自身の現代への還元、外に向かっては海外戯曲の取り込みと、天衣無縫といおうか、融通無碍というか、能楽は舞台芸能の世界を駆けめぐっている。

《いずれ味到を》さて「鉢木」だが、能楽の詞章を謡う謡曲のうちでも、「鉢木」は小謡といって比較的小振りな曲とされる。その修得すべき段階、筋書き等も勘案すれば、松平先生がこれを三商生に与えられたのは最上の選曲であったといえよう。とはいえ内容の起伏、場面転換、物語性からすれば、なかなかの大曲である。況んや十年間、これが厳粛な蛍雪の儀礼として謡い継がれてきたのは、稀有の出来事というべきであろう。

付け加えると、能楽研究家として業績を遺した英文学者・野上豊一郎編の岩波文庫『謡曲選集（副題・読む能の本）』は「代表的謡曲三十」を選んだとして、その一つに「鉢木」を取り上げている。

それにしては「鉢木」は面もつけず、舞もない「素の能」といった地味さもあってか、演目として興行の機会が少ないのではないかと常々思っていたら、朝日新聞のラ・テ面（平成二十三年二月十日）に八十二歳の女性読者からの投書。――一月三十日の「能狂言能〝鉢木〟～喜多流～」（教育）を見ました。若い頃、喜多流の謡を二年ほど教わり、友枝昭世先生のお名前を耳にしていましたので興味もあり、軽い気持ちでテレビの前に座りました。佐野源左衛門尉常世役と北条時頼役の問答の間合いの良さ、鳴り物の笛や鼓との巧みな調子にすっかり心を奪われ、ただ感動しました。日本芸術の最高のものを鑑賞させていただき、またぜひ次もと願っています――。

注19　友枝昭世。能楽シテ方喜多流十五世宗家喜多実に師事。平成二十年、人間国宝。七十歳。

迂闊にも教育テレビの放映は見逃したが、今度どこかで公演するような時は出掛けて行って、この優れた曲をじっくり味わいたいものだ。余すところなく。

【付記】独創的だった嘗ての吉澤徹三商初代校長の教育方針を伝える学校行事については、数多く語られている。なかでも卒業式典での謡曲「鉢木」の連吟は、その白眉をなすものといってよいであろう。

戦時中の三商人の誰もが身を以て経験し、未だに同窓会報や各期の同期会報誌上で、幾多の卒業生が話題としている。それだけ多くの人たちが触れていながら、熟知している故か、記述は断片的を免れない。そもそも「鉢木」の斉唱が何期生の卒業式まで続いたのかさえ、明らかになっていない。今や当事者も齢を重ね、その記憶も遙か彼方のものとなり兼ねない。本稿を、思い立った所以である。

本稿の構成に当たり、『三商同窓会報』、『五十年の歩み』、『創立70周年記念誌』（平成九年十一月発行）、『吉澤徹先生記念誌』（平成七年六月発行）、『十期会報』、『三商第十六期生の記録』（平成九年十一月発行）などを参考にさせて頂いた。ここに、関係各位に深甚の謝意を表します。また「鉢木・卒業式」の終了確認に、十一期・中島健作兄、十二期・吉岡鶴義兄の労を煩わした。厚く御礼を申し上げます。

なお本文中では構文上、敬称を略させて頂いた箇所があります。

平成二十三年二月二十日・記

「東京三商会」、四月から公益財団法人へ移行

石川昭税理士

約百年ぶりに改定された「新・公益法人制度」により、民法第34条規定の法人（東京三商会も該当）は特例民法法人とされた。これにより、平成二十五年十一月末までに「認定法」（註1）並びに「整備法」（註2）にしたがい、移行しなければ自動的に法人解散（保有資産はすべて手放さざるを得なくなる）となることから、早期に移行申請して認定を得る方向性を選択した。

結果として複雑な申請手続きを経て、今春三月、晴れて認定書の授与を得て、新年度の四月一日から、新たに『公益財団法人東京三商会』として新体制によるスタートを切った。

なお、電子申請書作成並びに審査ヒヤリング等、一切の折衝にあたっては、石川昭税理士（二十五期卒）に委ね、移行認定を得るに至った。

1．認可申請の経緯の概略について

・平成二十二年
十一月二十二日　移行申請の役員会決議
十二月　八日　最初の評議員の選任方法申請（都生活文化局 管理法人課）
十二月　十日　「認定法」による右申請の受理通知

・平成二十三年
一月　五日　最初の評議員選定委員会の発足
一月　十四日　定款案（旧寄付行為）の承認、新役員選任
二月　二十日　移行申請書完成（電子申請）
二月二十二日　東京法務局調査
三月　二日　移行申請審査の認可内定
三月二十五日　公益財団法人への移行認定書受理
三月二十九日　役員会（旧法人決算案、新法人主たる事務所移転決議）
四月　一日　旧法人解散登記及び新法人設立登記申請（効力発生日）
四月　十三日　登記完了
五月　十四日　移行説明会（新運営方針・体制の確立等の検討会）

（註1：一般社団法人及び一般財団法人に関する法律及び公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律）
（註2：右記の「認定法」の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律）

2．新定款による目的事項の趣意は？

商業に関する学科を有する東京都の高校の在学生を対象に、育英奨学事業を推進し、社会有意な人材の育成に寄与する目的としている。

3．その目的達成のための事業とは？

（一）育英奨学金の給与
（二）奨学生の指導育成
（三）その他当法人の目的達成に必要な事業としている。

4．機関の設置と権限について

この法人には各役割を担う人と組織を要している。理事は評議員会によって選任され、事業執行を委ねられるが、職務が限定されていて、評議員会が基本事項を決議する機能を持つ。業務監査は監事が会計監査とも行い、理事会への出席権も有する。

5．新法人としてのガバナンスの構築

新組織の運営にあたっては、新定款に準拠して内部統治を採用の上、各種マニュアル等の整備が急がれる。

6．その他

主たる事務所の移転日
去る五月末日、左記へ移転しました。

〒一三五－〇〇三一
東京都江東区佐賀一丁目七番一〇号
古田ビル
公益財団法人　東京三商会
電話・FAX　〇三（三六四三）三三九二
（文責柴崎）

ホームページ　http://www.h6.dion.ne.jp/~sanshou/

『ガダルカナル戦詩集』

第十期　荻野文雄

四期の吉田嘉七氏は、太平洋戦争の中でも最も悲惨な戦いであり、飢餓との闘いでもあったガダルカナル島攻防戦に一下士官として生き抜き、防人（さきもり）としての心意気と潔さと望郷の思いを『ガダルカナル戦詩集』四二篇で著した。軍人として祖国の難におもむいた戦中派日本人の典型と敬慕する。

ガダルカナル島は「餓島」という呪われた名で戦争下に生きた日本人の記憶から消え去ることはないだろう。

昭和十六年十二月八日の真珠湾攻撃をはじめ緒戦連勝の海軍は十七年三月、第二段作戦として米国と豪州を遮断する目的で秘かにソロモン群島のガダルカナル島に二千人の人夫を動員し、スコップで飛行場を造営した。

その意図を察した米軍は同年八月七日、海兵隊約一万九千人が上陸した。砲撃に曝された海軍陸戦隊三百人と人夫隊は為すすべもなくジャングルに逃げ込んだ。米軍は直ちにブルドーザーで飛行場を完成し、反転攻勢の基地とした。

陸軍は飛行場奪回のため小兵力を逐次投入したが悉く失敗した。同年十月九日、主力としてジャワから派遣された第二師団一万四千人の中に糧秣供給を任務とする吉田嘉七曹長が居た。岩波文庫の『萬葉集』を唯一の書物として携帯し、征かれたという。

既に制空権、制海権を失った日本軍は弾薬、食糧の補給が続かず、飢餓、マラリア病に冒され、急速に戦力が崩壊した。十八年二月からガダルカナル島撤退を開始した。戦死者二万名、うち一万五千名が餓死。

『ガダルカナル戦詩集』

20　コカンボ糧秣交付所にありて

椰子折れて倒れし道を
前線よりよろめき来たる
数人の兵を連れたる
将校の　われに頭を下げ
給わらば我食うならず
一線は補給とだえて既にひと月
密林は焼き払われて
わずかに残りし青き葉はなべて食えど
未だ来ず　米だに　塩だに
戦友は待ちに待てれば
かくわれら出て来しものを
一粒にても　一かけにても得たきものをと
ひたすらに乞える言葉や
鋭くもわが胸をつき　煮え沸る腸（はらわた）の
いかにとや我は答えん
連絡は早くとだえて
交付所とは既に名のみに
糧秣はかげすら煮く
椰子の実にいのち依る身の
苦しさや　はりさけんわが心
ああ　いかにとや我は答えん
好みてはなど　断わらん
補給はこれわが任なるを
かかる間も憎さも憎し
これ見よがしに敵機来て舞う

22　粥

ここにして　これあり
これぞこの米の粥
はるばると数千里
とよあし原みずほの国のみたからが
ひと年を汗にまみれて
磨き上げたる真珠　宝石
わたつ海の逆まく潮をのりきりて
いのちに代えて海軍さんの
護り来し神のたまもの
敵機の下をころびつつ
雨なす弾丸の中遠いつ
汲みたる水を飯ごうに入れ
爆弾ごとに火を消して
去りては又焚きつけ
つとめては煙出さぬ如く
ねじり鉢巻きをして炊き上げたる
この味は二つなし
いささか塩っぱいは
海水にとぎしためぞも
いざ喰らえ
わが戦友よ
喰らわて死にしわが戦友よ
これぞこの米の粥ぞ

25　補給戦

我が身逞しと
今にして誰が言わめ
かなとでのかの歩み
誰か今歩み得ん
銃とる手つかれはて
動くたびにいと苦し
人の身の　食わざれば
衰うは世の常ぞ
されど誰かよく言わん
わが魂も細りしと
烈々の志
飢うることに関わりはなし

33　妹に告ぐ

汝が兄はここを墓とし定むれば
はろばろと離れたる国なれど
妹よ　遠しとは汝は思うまじ
さらば告げん　この島は海の果て
極まれば燃ゆべき花も煮し
山青くよみの色　海青くよみの色
火を噴けど　しかすがに青褪（さ）めし
ここにして秘められし憤り
のちの世に掘り出でなば　汝は知らん
あざやかに紅の血のいろを
妹よ　汝が兄の胸の血のいろを

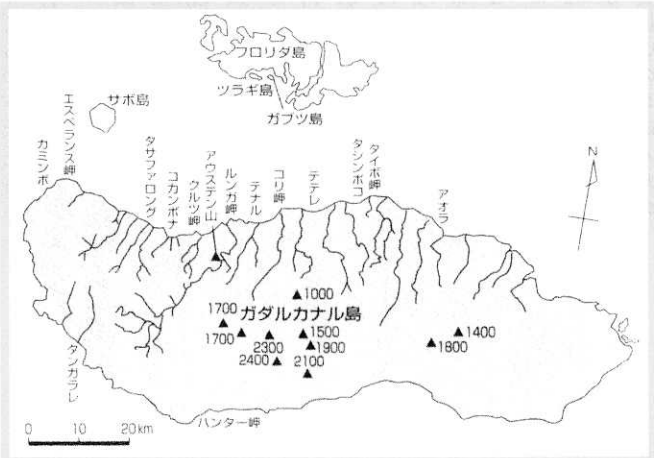
35　黄昏（抜粋）

お母さん
あなたはいつもやさしく匂って居られます
私のゆくところどこにでも匂って居られます
今も匂って居られます
昔の花の香りのように　夕焼けの雲のように
ああ　光もあなたのようです
小さい頃撫でて下さった掌の　そのままの
やさしさです
あたりは暗くなりました
ただ太陽だけが輝いて居ります
一点の火となって燃えて居ります
愛情の気高さに澄んで居ります
ああ　光はあなたです
今日の戦争の苦しさも　明日の爆撃の激しさも
この光の前にはものの数でもありません
この光をみつめて居ります
あなたの方をみつめて居ります
あなたの顔をおがんで居ります

42　敵地に眠る戦友に

大君のみこと畏み
征き征きてはるかなる海原は椰子の島
今夷（えびす）らがたてこもるかの島に
わが戦友は眠るかな
日くるめく常夏のジャングルの奥深く突撃し
再び帰らざるなり　わが戦友は
かの日には
鉄条網きりひらき
トーチカに己が身を弾丸と叩きつけ
名も知らぬ草はらに花と散りぬ
ああ　君はいまだに敵地に
屍には雨ふらば雨ふるまま
枯れ葉掩えば枯れ葉掩うまま
草むすや
とこしえに君は草むすや
おのれのみがおめおめと永らえて
戦友という名に恥じぬ
涙して
ただ涙しておろがみて誓うのみ
無念ならぬ
口おしからぬ
み墓だに立てずして
去り来たる戦友　われは
されど君を
いつまでも空しくも
敵の手にゆだねおくべき
ああ　荒潮の高なりに
われにつづけと
椰子に鳴る風のおとには
夷らをなべて砕けと
君は尚叫ぶかな
必ずや撃ち撃ちて
今はただわが胸に刻みたる君がみ名
かの土にいとしるく書きなして
御墓標（みしるし）をうちたてん
たてまつる花もなく
うつふして　そのままに草むせる
わが戦友よ

（平成二二年一〇月一日誌す）



（太平洋戦争研究会編著「太平洋戦争」より抜粋）

本年三月十一日（金曜日）に発生した東日本大震災により、亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災された皆さまとそのご家族の方々に対しまして、心よりお見舞い申し上げ、一日も早い復興をお祈りします

東日本大震災関連二題

総力で再生させよう
―東日本大地震に思う―

第二十二期　荻野弘康

＊＊＊はじめに

この度の震災の被害者の皆様にはこころより哀悼の意を表したいと思います。死者、行方不明を含めて三万人近い方々がおり、地域の復興も含めて各種の対策〔当然、原子力発電の放射能被害も含む〕も遅延しており、国家も国民も総力を挙げて復興と再生に取り組まなければならないのである。

＊＊＊当面の具体策

著名人から、庶民まで多くの義捐金が寄せられているが、支給の基準等を含めて被害者への支給は遅延している。義捐金を寄せられる方々も経済状況はそれぞれ異なり、金額の大小より、被害者の、地域の復興の再生、復興を願うハートをくみ取り、有効適切に活用しなければならないのである。＊百億と気持ちは同じ五千円――毎日／川柳より＊

支給基準など後でつくればよい、とりあえず　当面の生活費として一人当たり一二〇万円〔一年分〕を仮払金として支給する、など具体的で、素早い対応が求められているのである。二〇万人に支給しても二、四〇〇億円であり、義捐金で十分にまかなえる金額である。漁業も、田畑も、中小企業の従事者も、当面の収入もなく、明日の希望もない状態である。この状態からの復興、再生には少なくとも二～三年は掛かることが予想され、国民全体の温かい、総力支援が求められている。

中小企業への支援も同じに行わなければならない。事業規模と被害状況にもよるが、復興バンク等を立ち上げ、五年程度の無利息、返済猶予融資枠を設定し、事業の復興支援を行わなければならない。

＊＊＊復興予算についての提言

国難のこんな時に増税は論外である。上場会社には二四〇兆円近い留保金もあり、復興国債を三〇兆円程度発行〔低金利乃至無利息〕し、百年償還とする。先のことは不明だが、このような大規模地震、津波は、百年サイクルと想定し対応すべきである。

百年なら、各年三、〇〇〇億円程度の償還であり、将来の税制改正も含めて十分可能な復興予算である。

〔四方海で地震多発の我が国では百年単位の災害準備金、引当金を積立てて置くべきであったと思う。〕

＊＊＊原子力発電について

静岡の浜岡原子力発電はとりあえず中止となったが、今時の福島の原子力発電〔東電〕の一向に進まない修復事業を見聞していると東北地方だけではなく、日本全体、地球規模に及ぶ大事件である。

原子力発電事業の推進と維持がこのままでよいのかを真剣に考えなければならないのではないかと思う。

急激な変化は難しいが、長期的な展望に立って新エネルギー〔太陽熱、風力、地熱、海洋力等〕を国力を上げて拡大、発展させて、原子力発電との相殺を図り、廃炉に向けていかなければならないと思うのである。

＊＊＊結び―必ず復興できる

阪神大震災の時も、新潟の山古志村も、第二次世界大戦〔広島、長崎の原爆も〕の惨憺たる状態からも、我が国は、見事に立ち直っている。

震災復興事業は、与党も野党もなく、国家、国民の総力戦である。国も、地方自治体も、国民各位も復興に向けて全力を傾注しなければならないのである。

復興関連事業は、事業者にとっては売上であり、マイナスばかりではない。

復興事業の成功と経済の活性化は、被害者、亡くなられた方々も強く望んでいらっしゃることと思われるし、可及的、速やかに復興させて、些かでも安堵のはなむけとしなければならないと思うのである。

『東日本大震災』で被災した級友を探す

第二十四期　福原伸行

岩手県宮古市から、都立三商の名声に憧れて、国内留学していた級友（佐香義彦君）がいます。勿論、彼は三商卒業後帰郷して、家業の雑貨卸問屋の経営に、若い力と情熱を注いで来ました。三陸地方一帯を商圏に事業は好調で、宮古市の名士として相応の社会的な地位を確立して活躍して来ました。毎春に開催するクラス会には商用を調整して上京し、出席してくれました。「東京の友達に会うのが何よりも勉強になる」と、いつも言っていました。

平成二十三年三月十一日、あの大震災で宮古市も大変な被害を受けました。報道される現地の惨状を見て、私はテレビの前に立ち尽くしました。

三商三年の夏休みに、彼の家に数日間お世話になりました。まさに平和な地方都市という印象をずっと持ち続けていましたが、瓦礫の山となった街中の映像は、信じられない、信じたくないものでした。さて、「彼は無事なのだろうか」と自宅の電話に恐々アクセスしてみましたが、案の定繋がりません。三日目を過ぎてもまだダメでした。

被災者の消息を尋ねるサイトが立ち上がりましたので、彼についての投稿をしました。連日パソコンを開けて情報を待ちました。彼の息子さんの消息を探す、学友と思われる人の投稿を見つけ、「お父さんを探しています。」と書き込みをしました。この頃に、各避難所の避難者名簿が相次いで見られるようになりました。岩手放送のサイトで、宮古市の常安寺避難所に佐香夫妻の名前を見つけて、小躍りするほどに感激しました。兎に角無事で良かったと、クラスのメンバーにも取り敢えず電話で連絡をしました。常安寺のホームページから電話番号を知り、何度も掛けてみましたが、通じませんでした。

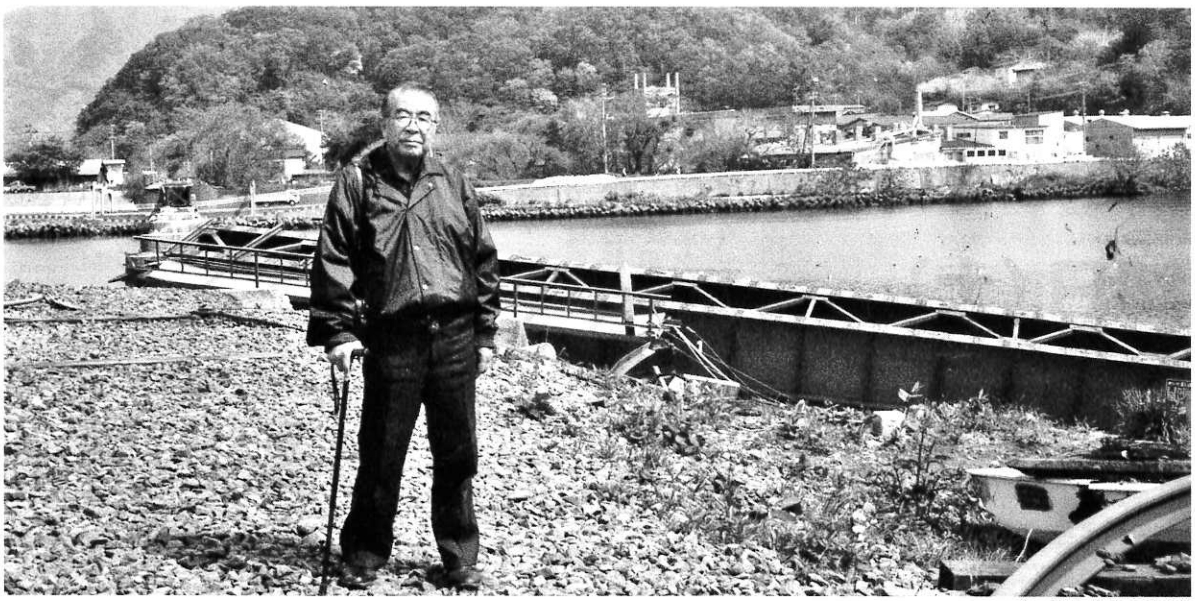
「お父さんを探しています」と書き込みをしたサイトに「いとこです」と名乗る方が登場して、諸々のことが劇的に解決して行きました。先ず、彼の息子さんご一家がご無事であること、佐香夫妻は自宅に戻るべく、半壊の家の片付けを、ご兄弟たちの手伝いで進めているとのことが分かりました。さらに（これが一番有難かった）私のアドレスに、メールで彼の携帯番号を、彼の許可を貰って送ってくれました。電話はすぐに繋がりました。私と彼、男同士は「やあやあ、ああ良かった。」という会話ですが、何年もお付き合いを続けてきた奥さんと私の妻は、涙が先で話ができないようでした。

その後は避難所から自宅へ移り、片付けに追われる毎日であるとのこと。自宅電話も繋がり、会話は出来るのですが、遠く離れてあれこれ心配をするだけで、何も力になれないもどかしさを感じています。とりあえず我が家の備蓄品の中からあれこれ選んで小さな荷物を作り、「通常より二日から一週間余計にかかります。」という宅配便で発送しました。四日目に「ありがとう。」の電話が来ました。以前、自分で運転して通った道筋ですので、大方の見当は付きますが、この混乱の中よくこんなに早くついたものだと驚きと感謝の気持ちが一緒に湧いてきました。

自然災害の恐ろしさを改めて知らされました。平和な生活が一瞬にして無に帰することを知らされました。私達の日常に、まったく理不尽な外力が襲い掛かるのです。何の備えも出来ず、抵抗も出来ません。備えが出来ないというのは、多分私が間違っていると思います。今回の大震災でも、昔から言い伝えられた津波についての備えを、ひたすら守り続けて来た人々が、命拾いしたという報道を見ました。たった一瞬のための備えを百年もの間守り続けなければならない、それが天災に対する我々人間の義務なのかも知れません。これを怠れば、次の災害を乗り切れないかもしれません。

ともあれ、今度の大震災で未曽有と言われる被害を受けた被災地が、着実に復興への歩みを始めたとの頼もしい知らせも聞かれます。

この文を書いている今、大震災から三週間が過ぎた日ですが、まだ原子力発電所の動向が心配です。すっかり停まっているのだろうか、冷やされているのだろうか、閉じ込めるのはいつになるのだろうか。大きいの小さいの、日々、余震が続いています。原発の状況も日ごとに変化していますが、一日も早く、落ち着いた、平穏の日が戻るよう祈らずにはいられません。



（24期　佐香義彦）

私の履歴書シリーズ

素晴らしい人との出会いに唯々感謝！感謝！

第二十六期　古田勝一

今年五月、豊田紀雄さんの主催する『うしろ姿のしぐれてゆくか』という劇を観るチャンスがありました。

最後の舞台が暗転すると、胸に熱いものが込み上げて涙が溢れるのをどうすることも出来ませんでした。

主人公は自由律俳句の俳人で「昭和の芭蕉」と呼ばれた「種田山頭火」…　水のやうに、雲のやうに…常に迷い、酒に溺れ、俳友たちの援助を受けながら歩んだ赤裸々な生き様…自由奔放に生きられたのも類稀なる才能があったればこそ…　ウラヤマシイ！顧て、自分の人生は如何なものか。

昭和三十四年にあの懐かしの「時計塔の聳える校舎」を卒業し、日興證券㈱へ入社しました。（同じ会社なのに、高卒の私達と比べ）想像を遥かに超えた優秀な能力の大卒の人材がなんと多くいること！…まさに「井の中の蛙、大海を知らず」状態で、この歴然とした差を何とか少しでも縮めたくなりました。私の双子の兄も一人は慶応、一人は早稲田（早慶戦）を出ておりましたので、「入社一年目はまず会社に慣れよう…そして二年目からは日興証券勤務の傍ら学校へ行こう」と目標・計画を立てました。

そんな訳で、二年目は中央大学第二経済学部（夜間）へ入学しました。その頃、鶴岡恒夫さんは明治生命㈱に勤務の傍ら、向学心に燃え慶応大学の関係に…橋本宣一さんは三菱商事㈱に勤務の傍ら御茶ノ水のアテネ・フランセで英語の更なるバージョンアップで学ばれておられたと記憶しております。

夕方、兜町の会社を出ると都電に飛び乗り淡路町下車、御茶ノ水の聖橋方面へ急ぎ坂を上る。そして学生食堂に駆け込みカレーライスに喰らい付く…ウマイ！…一人ポッチの青春の味でした。

昼間部の生徒の中には、ともすると単位だけ取れれば良いと麻雀などしてサボる人も居るとは聞いておりましたが、現実に自分が夜間生になってみると多くの学生が時間を惜しんで熱中している姿に接し、想像以上にオドロイタ‼　猛烈に襲いかかる睡魔に自分もしっかりせねばと発奮したことでした。

また、当時は安保闘争の真直中。校内はバリケードが張られたり、シュプレヒコール等で騒然としていた。その中で私は「社会学」を樺 俊雄教授に御教示頂いていたが、先生の娘さん（東大生・樺美智子さん）が亡くなるというショッキングな出来事があった（デモ隊が国会通用門突入の際、警官隊に襲われ圧死）。先生は社会学を研究される学者の立場と、父親としての苦しい心境を吐露されたが、それを自分の中でどう整理して良いのか釈然としなかった思い出があります。

また、名門三商それも簿記の家元とも云える斉藤克先生に担任をして頂いたにも拘わらず授業をサボり、卒業時には日商の初級しか取得していなかった、その後ろめたさから「簿記」を専攻しました。

この時ばかりは執念でエネルギーを燃やし、集中した積りです。（今から五五〇年程前、イタリア・ベネチアのルカ・バチョリという人が考案した複式簿記…当時はコンピュータも無かった時代でしたので、あの文豪ゲーテにして『複式簿記は人類の最高傑作』と云わしめたそうであります。）

その後、日興證券では肺結核に罹ったり、高卒入社故の先々の限界を考え、六年半程で退社しました。そして、父と父の弟が昭和七年に創業した中外徽章㈱に三年半程籍を置き、徽章業の「いろは」を修業しました。

昭和四十四年、三商の「三」と日興の「興」の字を戴いて三興徽章㈱を設立しました。幸い、父達の信用と実績により、お得意先も上場企業の数社を受け継ぎスタートすることが出来ました。…その三興徽章㈱も四十年のフライトを終え、ソフトランディングすべく着陸態勢に入りました。

この様にして徽章業界に転じたのでありますが、全国組織のオリンピック事業推進委員会を立ち上げる際、松下徽章㈱の松下芳展（よしのぶ）社長が事業推進委員長、私が財務部長として業界に少しでもお役に立てたのも、あの時集中した簿記が生かされたのだと有難く思っております。因みに松下社長の名付け親は放送作家・永六輔さんの父君（最尊寺の住職）だそうです。業界最大手で酒豪の松下さんと超零細で下戸の当方、傍から見れば不思議かもしれませんが、本人同士は「ヨシノブさん」「カツイチさん」と呼び合う仲であります。

仲といえば、ここで日興證券㈱時代の出会いについて触れたいと思います。

私は、会社でワンダーフォーゲル部に所属しており、そこで櫻田 慧氏（㈱モスフードサービス創業者・会長）と親しくさせて頂きました。櫻田氏は、昭和三十九年三月のケネディーショックで日興證券㈱ロスアンゼルス支店から東京本社に転勤しその後昭和四十六年夏、銀座・三越の一角にオープンしたマクドナルド一号店の試食が転機となりモスバーガーを立ち上げた方です。

櫻田氏は当時『オヤ？！これはアメリカで食べていた「トミーズ」のハンバーガーの方がジューシーでおいしかったぞ』と確信し、まだ外食産業などと云う言葉も定着していない時代、ハンバーガーの差別化を図り『起業するのは今だ!!』と計画…ネーミングはワンゲル時代を想起し、山（Mountain）・海（Ocean）・太陽（Sun）『MOS』で発足しました。

櫻田氏とは、良く人間の信頼関係について話し合いました。当時私は既に日興證券㈱を辞めておりましたが、櫻田氏から『ハッピーな会社に創り上げるから、モスへ来てくれ』とのお誘い（今で云うヘッドハンティング）が何度かありました。人生に「もし」は無しと申しますが、選択によっては変わった生涯を過ごすことになったかも知れません。

そのモスバーガー、今や東証第一部にも上場し、日本全国及び海外支店も有する一大企業へと成長しました。私も零細株主の一人として、シンガポールに行った時等も懐かしく「MOS」の店舗に立ち寄ったりしています。

残念ながら、櫻田 慧氏は十二年程前に一一四億もの遺産を残して他界されました。その後、日興の同期入社の清水孝夫氏もモスの会長迄務められ、数年前勇退されましたが、今でも引続き田鶴子夫人共々家族ぐるみのお付き合いをさせて頂いております。しかし、私にとって日興證券㈱で一番良かったのは、発生川 昭さんと云うユニークな人物との出会いです。

話が後先になりましたが〝らんぷの仲間〟との出会いについて。

第十代生徒会も志村 泰男副会長のバツグンの企画・立案能力！ そして若くして大尽の風格を漂わせた橋本宣一さん…。今や詩吟の総範として御活躍、在校中より皆の母の様に頼れる存在の片山 千代子さん…。塚本博子さんには、私の卒業生総代としての答辞の巻紙も達筆な毛筆で認めて頂いたり、小西六写真工業㈱在社中も多岐に亘りお世話頂いた大恩人です。

オヤ！どこからともなく能田 博子さん、山中 多か子さん始め四人の女性の美しいコーラスが聴こえて来ましたヨ…クライマックスに達して来ますと、何やら根岸 秀満さんの低音も加わり、より一層のハーモニーを奏でているじゃあ～りませんか。

地域に密着した商売の在り方を学ばせて頂いた藤村栄三さんは亀戸五丁目中央通り商店街の理事長という重責につかれておられます。（ホームページ、ブログでもご活躍中）。

書ききれませんが、優秀な素晴らしい〝らんぷ〟の皆様に出会えましたこと、特に豊田紀雄さんと云う人間味溢れる奥深いスケールの有る人物と巡り会えたことは何とラッキーなことでしょう。

信頼出来る良い人との出会いの多い方が人生の財産持ちとするならば、私はかなりの強運と幸運に恵まれた財産持ちと云えます。

私は毎年開催の二六期同期会での挨拶で、必ず「生涯青春であり続けたい!!」と吠えています。きっと、『あの馬鹿のワンパターンがまた始まったぞ!!』と云っている人がいるのは当然承知の上です。誰に何を言われても気にしません。前進あるのみです。

生きている限り…感動的人生を味わう為、これからも吠え続けて参ります。

「一隅を照らす者で 私はありたい。」
（伝教大師）

「同窓会の楽しみ方 4」

第三十一期　三浦 康二

同期会、クラス会等で同窓会にはたくさんのドラマがあります。少しだけ出席者からのメッセージを紹介いたします。

五十歳の女性「長い間○○さんの奥さん、○○君のお母さんとしか見てもらえなかった。今日、子供のころの名前で呼ばれ、自分を取り戻すひとときになりました。」

難病と闘う働き盛りの男性「同窓生との記念のカメラに収まり、色々な会話をした。自分はひとりじゃない、そんな生き抜く希望を同窓生の仲間からもらいました。」

その同窓生の仲間たちもそんな彼の気力を振りしぼる姿に逆に勇気づけられた。

同窓会に招かれた教師の発言「教師にとって同窓会ほど大切なものはない、自分の教え子がどのような人生を生きたか見届けることは教育者の責務であり財産になる。」

友情にまさる宝はありません現在の無縁社会と呼ばれるような世相にあって、人と人との絆を結ぶ意味は重さを増しています。

同窓会を通じて級友との再会や、生涯の仲間をつくる大切さを同窓会に参加することで実現できるのです。

ここで世代に応じた同窓会の楽しみ方の紹介をします。

〈二十代〉まだ若く、お互いの刺激となる出会いになります。仕事、転職、結婚などの貴重な情報交換ができるでしょう。

〈三十代から四十代〉家族の話しが主になります。育児の悩みも多いようです。一人で悩みを背負っているとつらいものですが、旧友から子育ての知恵を拝借して、気持ちが軽くなる人もいらっしゃいます。

〈五十代から六十代〉第二の人生のネットワークづくりを開始する時です。病気や定年後の生きがい、老後の独り暮らしなどの問題も迫ってきます。

そんな悩みを共有できる友人がいればその後の人生にプラスになります。

〈七十代から八十代〉いよいよ人生の総仕上げをする年代です。毎年楽しく集まって、どれだけ元気か競い合う方が増えています。ぜひ生涯にわたる友情を末長く確認して下さい。

都立三商の伝統と歴史とほこりの精神は「後輩の成長こそ先輩の勝利」と同窓生の中に常に脈打っております。これからも大いに同期会、クラス会を盛大に開催して、これからも母校の発展と同窓会の活性化に全員で力を合わせてまいりましょう」

「頑張れ三商」、ブランド校復活に同窓生も支援の議論をしよう

第二十九期
大川幹雄

母校を愛する同窓の皆様にご相談です。私は第二九期卒で卒業後五〇年となる、二九期は九組構成四六〇名、物故者三五名他で現在会員三五八名、隔年に同期会を開催、毎回一〇〇名程参加で母校の思い出話で和やかに交流を続ける。私は最近各組持回の同期会代表となり、役割で得た情報として寡聞のため不確かだが、最近の経済環境の変化、少子化等の影響を受け都立高校の統廃合検討の際に、「三商が一時統廃合候補」に上がったと聞き驚いた。情報では全国各地で実業系高校が環境変化と地元経済の低下を受けて、統廃合対象となる例が多い。候補校は自ら進める学校活性化策に、地元経済界および同窓会等の支援を受けて復活を果たす事例が出ている。三商も同窓会組織で母校支援をしていると聞くが、母校存続が俎上に上がった現状が同窓生には伝わって無い。母校が末永く優位で存続できるよう、同窓生が今まで以上に「母校活性化に向け関心を深め」、「同窓各世代が活性化に何が支援出来るか」の議論を行い、出来る範囲で学校の活動、行事等について支援の検討を提案したい。

私達が卒業した世代は恩師、先輩諸氏のご苦労、業績貢献の恩恵を受け、高度成長期であったこともありブランド校として三商卒は各企業で一目置かれた。例え話として「サンショウは小粒でもピリリと辛い」と言われ、課題が出るとイの一番で「考えは」の諮問を受け、常に先頭に立つ牽引役として成果を上げた。今時のブランド校とは何だろう、最近独立行政法人国立大学経営者と話すと「学生の質を高め、成果の露出を増し、入学志望者増、卒業生進路等の質を高める」等の結果を出すと聞く、恐らくは三商も同様と思われる。

同窓生の支援議論に当たり、第一に現在学校経営者に目指す方向、内容、現時点の進捗段階等を開示願い、学校の活動、行事等で同窓生が出来る支援内容の提示が必要である。最近の生徒諸君の学力程度は不案内だが、良く言う「鶏と卵」ではないが、「成果を上げる学校だから高資質の生徒が集まる」のか「良い生徒が集まるから高い成果を上げる」の議論ではなく、「社会の求める課題対応力を持つ在校生徒を育てる」事を進めたい。第二に「生徒の課題対応力」育成には、同窓各世代で支援する内容が異なるので、目的実現のため各世代が出来る事から始めればと考える。我々現役を退いた世代は、お互いの知識、経験、時間を持寄り、活動のお膳立て、進行役、助言役等で、個人ではなく同窓会で調整後分担して、支援のお手伝いが出来ると考える。

一例であるが私の提案として、「地元経済活性化に貢献」合わせて「生徒の課題対応力をつける」の実現に向け「生徒が社会の様々な事象に関心と疑問を持ち、自ら考え、自ら判断して挑戦、実行していく力を持つ」、そのため「生徒が現場で自分の目で見て、耳で聞き、肌で感じ、課題を把握し、関係者に今後の方向付けを提案できる」「課題把握、改善提案力を持つ生徒の醸成」に次を提案したい。

三商は東京下町に所在、商家子弟が多く学ぶと聞く、最近日本各地で大手小売業が隆盛で、旧来型商店街がシャッター通りと揶揄される現象を見受ける。他方三商地元の門仲、砂町、亀戸他旧来型商店街の賑う風景がテレビ放映され、買手の必要に応じ、琴線に触れる商い手法が結果に繋がったとの纏めである。三商ブランド復活に向け「地の利」および「商業高校ならではの課題へ応用の効く生徒作り」を支援したい。具体的には学校生活で一番充実の二年次に、グループ編成で対象商店街に張付き、元気店、不振店それぞれを観察、中に不振店でも住民支援を受け、粘り強く商い継続事例を見受ける、それらの商店街の個別の活不況理由、購買者現象、経営者努力等の現状、改善の方向を取り纏め、グループ発表会を行うことでお互いの着目点、纏め方などの違いを明らかにする。これにより「生徒の知識経験の拡大、事象認識、分析、プレゼン手法」が身に付き、実業で活かせる「人真似をしないで自分の頭で考える感性を磨いた」生徒の応用力が育てられる。纏めた結果は別の機会に地元商店街に提言、地元活性化の一翼を担えば、地元から「商売繁盛、人材育成は三商」との信頼、期待に結びつく。学校・生徒が主体となるが、我々同窓生が前作業、グループでの討議、発表会等の段階でアドバイザーとして支援を行う。なお三商HPには二年次に地元企業、商店街でインターンシップとの記載では職業実体験のみと読み取れる。

活動にあたり前作業が必要になる、①学校からは地元支援の取組方針を明確にする、例えば「迎える高齢化社会に、小売業は身近で生活の糧を得る基盤たれ」の実現へ、小売業が生き残るために三商の果たす役割を明示する。②業界に詳しい同窓生が現代の小売業の実態、悩み課題、検討されている改善方向等、及び同窓先輩店主が就業体験談をレクチャーする。

私はある企業で永く勤務、後半十年ほどはある事業部経営に携わり、従業員採用、業績評価等、人を評価する難しさを痛感した。最近は経験、資格をもとに物流コンサル業で、主に中小企業経営改善のお手伝をする。経営者から経営方針、目標を聴取、現場で従業員、取引先等から課題、今後の対応等の考えを聴取するが、中には自社課題を把握せず、安易にコンサルから「課題を診断、改善施策および進め方の提示」の要求が少なくない。当事者が自ら課題としての認識がなければ、如何に良い改善策でも定着は望めず、「課題把握、改善提案力を持つ」人材を痛感している。

余談だが今一つの母校明大もここ十年ほど報道が少なく低迷を感じた。関係者の文武両道での復活努力で報道に接する機会も増え、昨年は入学志願者数が日本一となり、最近は我が地元神奈川で箱根駅伝応援に紫紺の旗を振り、母校の復活を肌で感じている。是非「三商ブランド復活」報道の実現を熱望する。

簿記部の思い出など

第二十五期（元・簿記研究部）
平山朝夫

今から五十六年前の昭和三十年四月　我々二十五期生四百七十一名（男子三百八十九名、女子八十二名）が入学した当時、クラブ各部の新入生勧誘活動は熾烈で屋上から沢山の垂れ幕をさげ人海戦術で行われていた。その中で私は簿記部を選び入部した。その簿記部を語る前に先ず昭和三十年はどんな年であったか触れてみたい。巷はどこへ行っても、春日八郎の「お富さん」が流れていて、ラジオのユアヒットパレードでは「エデンの東」が三年間連続して第一位を続けるなど、今思うと時がゆっくり流れていた一面、「太陽族」という新語ができ、湘南の海は若者で溢れていた時代であった。

娯楽と云えば映画全盛期で、ジェームス・ディーンの「エデンの東」、「ジャイアンツ」等映画研究部（映研）割引券をおおいに利用させてもらったのも楽しい思い出だ。

昭和三十一年十月の開都五百年記念大東京祭のイベントも忘れられない思い出だ。その時習った東京都歌は今でも口ずさめる。

経済に目を移すと、「もはや戦後ではない」と云うキャッチフレーズ、「消費は美徳だ」との言葉が流行、経営学、マーケッティング理論が盛んにアメリカから導入され、ダイエー一号店（千林店）が開店、多量生産、多量販売、多量消費の高度成長期が胎動した時代であった。そのような時代の要請から会計学、簿記が重要な地位を固めていった。

簿記部（正式名称は簿記研究部）の当時の規模は部員数四十名余、我々二十五期生は十四名（うち女子一名）、上級生が講師となり、星野先生等の市販テキストと手製ペーパーに基づき、黒板を使って全商簿記検定を目指した補習を主に行っていた。

二年生で全商簿記一級を取ることを目標に一生懸命頑張っていた。上級生の熱意は大変なものだった。当時を振り返ってみると、簿記は、数学と並ぶ理解困難な科目だったので、大変だったなとの思いと自分が上級生になり下級生を教えた時は試行錯誤の連続だったが、充実感、満足感があったとの思い出が昨日の出来事のように思い起こされる。

私にとって、この経験は後々、NPO法人、社会福祉法人を立ち上げるボランティア活動時に大変な財産となった。

さて、全商検定試験とならぶ簿記部最大のイベントは三商祭（文化祭）であった。

最上級生の時、東京の私鉄八社の経営分析を行い、展示、発表した。東武、西武、東急、京王帝都、小田急、京浜急行、京成、帝都高速度交通営団（銀座線、丸ノ内線の一部池袋から御茶ノ水のみ）の本社を夏休み期間に訪問、聞き取り、事業報告書集めに奔走、作成に汗を流した記憶が鮮明に残っている。

とにかく暑かった…　私鉄の本社とは云っても当時は今とは比べ物にならない程粗末な建物で、どこの会議室、応接室も全く冷房などなかったのだから…三商祭の掲示内容については忘却の彼方に行ってしまったが、かすかな記憶をたどると会社設立経緯、地域影響度、会社カラー、経営効率等々を円グラフや棒グラフを沢山使ったカラフルな展示だったと記憶している。どの程度の人が見て呉れたかは定かでない。

会社訪問の印象としては東急が学生に対しても、紳士的で時間を掛けて会社内容を懇切丁寧に説明してくれたこと、西武は経営効率の良さをアッピールしていたことが後々まで強く印象に残っている。

簿記部の部室は三階西側にあった。狭い部屋は常に最上級生がわがもの顔に占拠していて、新入生はおろか、二年生になってもなかなか入り難かったと記憶している。上級生はとにかく偉かった。

今年の新年会で簿記部の思い出話をさせて頂いたが、その時、十九期の増田昌弘先輩（三商会計人会会長）から簿記部は我々が作ったのだとのお話を承り、更に偉大さを実感した。

さて、待望の三年生になって部室はなにに使用していたかと云うと学習とか会議とかより机の形が程良いことから、机が卓球台に変身、ピンポン球がゴロゴロしていた。この記憶だけが妙に鮮明で、これが楽しかった簿記部一番の思い出です。

今年は太田道灌が江戸城を築いてから五百五十五年目にあたります。語呂合わせでゴーゴーゴー。元気でボランティア活動などに積極参加したい所存です。

（写真・中央が平山）

氷園会（大関庵）の旅

第十九期　岡野静夫

ここ数年十九期（大関庵）の集いの有志で、竹内巳喜男君の軽井沢の別荘（氷園）を足場に、草津温泉、万座、小布施、別所温泉、小諸等一泊小旅行を楽しんでいるが、今年は戸隠等、北信方面に行ってみようと、小生の第二の故郷（集団疎開先）信州小川村で一泊、戸隠山から善光寺参りをすることになった。

七月十三日（水曜日）午前九時、上野駅公園口に集合、総員十一名二台の乗用車に分乗、勝亦、木戸両君の運転で出発、何分にも全員喜寿を超えた後期高齢者ばかり、安全運転第一を願い、首都高から中央道、長野道経由、長野ＩＣでおり、長野～白馬のオリンピック道路を経て、信州小川村に向かった。

当初予定より遠回り（約七十㎞）、かつ渋滞に巻き込まれた事もあり、二時間遅れの十四時半の小川村到着となった。元村長の鎌倉晨弥氏（小生の疎開時代の学友）が出迎えてくれ、早速同氏の案内で小川村の観光ポイントを巡る事となったが、昼食抜きとなってしまった為、小川の庄おやき村に向かい見学かたがた、昼食代りのおやきを食し、次いで郷土歴史館（元長野県知事公舎）、信濃三十三番札所高山寺（県重文）、北アルプスの絶景ポイント（大洞峠）、戸隠神社信仰遺跡（武田、上杉の戦乱を逃れて一時期この地に移っていた）等を廻り、宿舎の「林りん館」に入った。

郷土歴史館も高山寺も時間が遅かったが、予め鎌倉氏が手配して頂いていた為、館長（教育長）住職が懇切丁寧に説明、案内してくれた。

「林りん館」は村営の宿泊施設、高地の森の中の一軒宿、今回は我々だけの十一名の借りきりであったが、夏休み時期は予約でいっぱいとの事である。

食事は素人仕事で今一であったが、一泊二食ビール、酒、飲んで@八、三〇〇程度であれば致し方ないか？

風呂、部屋は先ず先ず、高地の為、冷房はないが、涼しくゆっくり休めた。

翌早朝、四時半起床、部屋からの北アルプス（鹿島槍、五龍、唐松、白馬等の連山）の絶景が素晴らしかった。青木紀八君と二人、立屋城址、展望台、戸隠神社信迎遺跡の案内など、食事前の三十分程の小散歩をした。他の諸兄はお疲れで今だ床のなかか？

朝食は七時半、珍しかったのは全員に大振りの黄身が二つ入った生卵が出たことだ。これも話題の一つかも？

八時半出発、途中鎌倉氏のガソリンスタンドでガソリンを補充、多々お世話になったお礼を申上げ、お土産なども頂戴し、戸隠神社に向かった。

前日来た大洞峠を通り、鬼無里村を経て、戸隠神社へと、（大古の戸隠街道）、何分にも狭く登り下りの多い山道、運転手の方には、大変なご苦労をおかけした。車も一台がオーバーヒートを起こし、危うく大事にいたるところ、展望台で小休憩し、水を補充、休ませた。車も我々と同じ後期高齢者、あまり無理をさせたらいけないと大笑い。車の体調回復を待って再出発、三十分遅れで十時半戸隠に到着した。

先ず、最初に宝光社にお参りしたが、本殿への急な一五〇段の階段を前に登段を断念、下の鳥居の前でお参りを済ませた。小生のみ五十段上ったが、誰も付いてきず、断念。

次いで中社を通り越し、奥社に向かう。ここは戸隠神社の本社だが本殿まで駐車場から片道四十分、覗いただけでもう充分と参道下で待つというので、竹内、勝亦、青木の三君と小生の四名のみ、隋神門（杉並木の入り口）まで行きお参りをすませた。（往復三十分）隋神門から奥社本殿までの樹齢四〇〇年強、二〇〇本の杉並木は粛然とした精気に溢れ見事、是非他の人にもきて欲しかった。残念。

そのあと、神秘的なパワースポット鏡池（紅葉の名所）に立ち寄り、昼食に名物戸隠そばを食する予定であったが、急きょ小諸で温泉に入り、ウナギを食べたいとの声が上がり、戸隠そばを取りやめ、善光寺参りも省略、小諸の「あぐりの湯こもろ」に直行した。小諸到着二時半、あいにく目的の温泉がリニューアルで休業、頼みのウナギ屋も時間外でダメ、全員ガックリ。致し方なく、近くの布引温泉で汗を流し、食事は高速の途中、横川ＳＡで各自が随意取ることに変更した。

四時半、小諸を出発、信越道（横川ＳＡで食事）、関越道から外環、首都高を経て一部が池袋下車、最終上野で解散、夫々無事帰宅した。

酷暑の東京を逃れ、涼しい信州への一泊二日の旅であったが、延べ走行距離約六〇〇㎞、（十五時間）車の中、本当にお疲れさま、特に運転の方々に御礼申しあげたい。パワースポット戸隠神社の滞在が僅か二時間、三社参拝も入り口でのみ、ご利益も余り期待出来まい。

しかも二日ともまともな昼食なし、期待の「戸隠そば」もお預けと、時間配分を誤った幹事の不手際、諸兄に深謝せねばならない。

ともかく東京は暑い、喜寿を過ぎた我々、飲み食いは元気だが、足の衰えを感じさせられた。後期高齢者とはいえ長寿の時代ではまだまだ若い。この酷暑を乗り越えて、足を鍛え、来年も「氷園会の旅」に元気な姿での参加を期待したい。

「パパスコーラス」七年目の熱演

第二十八期　木村芳夫

今度私が所属しているコーラスグループ『パパスコーラス』について何か書くようにとのお話しを頂きましたので、大変拙文で恥ずかしいのですが、少し書かせて頂きます。

まず、去る五月二八日に私どもパパスコーラス創立七年記念コンサートの開催に際し、ＯＢの諸先輩が多数ご来場され熱心に耳を傾けて頂いたとのこと、大変感謝しております。そして、その公演に好感をもって頂いたとのことで、コーラス会員の一員としてパパスコーラスについて申し述べたいと思います。

パパスコーラスは現在会員十五名の男性コーラスグループで今年七年目です。江東区には男性コーラスで「磯部とし」という実力のあるグループがありますが、私達はそれを一味違った多少粗削りではありますが、元気な歌声を聞かせるユニークなコーラスグループでありたい思い、毎週一回ほど練習を重ねてまいりました。幸いなことに指導者に二期会会員のオペラ歌手福山出先生とピアノの沼舘千佳子先生に恵まれ、本格的な発声練習ができ少しは上達したと実感しております。

三月十一日の東日本大震災後には私どもも自主公演の開催が危ぶまれましたが、皆様の力強いご支援に支えられ、開催まで漕ぎ着けることができ、深く感謝しております。

今後とも精進を重ねて次の自主公演が開催できるよう頑張りたいと存じます。皆様方には一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2011/5/28(土)17:00～19:00
亀戸文化センター/カメリアホール

なお、毎年江東区主催の合唱祭にも参加しており、その節は是非ご来場のうえご鑑賞頂ければ幸いです。

最後に私どもパパスコーラスは、歌うことが好きな方の入会を待ち望んでおります。ご連絡をお待ちしています。蛇足ながら、私が入会したきっかけはパパスコーラスの代表者の賀田氏が大学ＯＢの集まりの際、熱心に勧誘され参加することにしました。最近、肺活量が減って声が出なくなって心配しておりましたので、コーラスの発声練習により声がよく出るようになった気がします。カラオケでストレスを発散するのも好きですが、コーラスでルールにしたがって声を出すことは、また別の意味で適度な緊張感があってよい刺激になります。

以上、拙文で恐縮ですがこの文章を終えさせていただきます。乱筆乱文をお許し下さい。

平成二三年七月一二日

（申込先）江東区木場三ノ一〇ノ七ノ六〇五
木村芳夫
（電話〇三-三六三〇-五一七八）

第19回 東京校歌祭のお知らせ

日　時：平成２３年１０月１日（土曜日）
場　所：日比谷公会堂
受　付：午後２時　受付を済ませて下さい。
（その後、少し練習をします。）
出　演：午後３時４０分頃
集合場所：日比谷公会堂エントランス階段の下広場、三商の幟が目印です。
服　装：男性はダークスーツ、女性はそれに準じた着用をして下さい。
終了後、有志で反省会を行います。
（会場：富国生命ビルB2［こだわりやま］）
会費は概算4,000円（内、1,000円補助します。）

三商同窓会報第五十号
平成二十三年七月一日発行
発行者　東京都立第三商業高等学校同窓会
発行責任者　三商同窓会報委員会
編集者　東京都墨田区業平一の一七の五
都立三商同窓会事務局
杉本光男
電話　〇三（三六二三）二一八五
ＦＡＸ　〇三（三六二三）一八五九
印刷所　日本原色印刷工業株式会社

表具処

創業天保年間

経新堂稲崎

五代目店主　稲崎棟史（第22期）

〒103-0007　東京都中央区日本橋浜町2丁目48番7号
TEL: 03-3666-6494
FAX: 03-3666-6989
http://www.kyoushindo.com
E-mail: info@kyoushindo.com

有限会社　大石商会

リサイクルショップ

てるてるぼうず

取締役会長　大石傑一郎

曳舟本店　〒131-0032 東京都墨田区東向島2-14-1メゾンド大石1F
メゾンド大石1F　☎3616-2434（代）FAX 3861-0067
東向島店　〒131-0031 東京都墨田区墨田1-15-15ライオンズプラザ1F
☎3616-2430
自宅　〒111-0051 東京都台東区蔵前4-28-5 蔵前大石ビル4F
☎3861-0084

細田木材工業株式会社

代表取締役会長
細田安治

合法木材供給事業者認定
［輸入協-037］

〒136-0082
東京都江東区新木場
2-15-28

TEL 03-3521-8701（代）FAX 03-3521-8708
e-mail:ceo@woody-art-hosoda.co.jp
http://www.woody-art-hosoda.co.jp/

おしゃれエプロンメーカー

有限会社　篠崎

取締役会長　篠崎　清　（第22期）

〒272-0021　市川市八幡4-17-33

TEL047-334-5027　Fax047-334-5432

夢をかたちに・・・

Chugai

中外徽章株式會社

〒101-0052　東京都千代田区神田小川町3-2
TEL:03-3294-3431　FAX:03-3294-3436
http://www.chugaikisyo.co.jp
相談役　古田勝一（第26期）

「生涯青春で有り続けたい」との願いから、第26期は毎年同期会を開催しております。

第26期 同期会会長　古田勝一

梱包・輸送・倉庫業

日祥梱包倉庫株式会社

代表取締役　有坂祥一（第22期）

移転先　〒251-0035　神奈川県藤沢市片瀬海岸 1-9-8-410
TEL・FAX 0466-22-0851
勤務先　日祥梱包倉庫（株）
神奈川県藤沢市遠藤 4651
TEL　0466-48-5641　FAX 0466-48-8533
http://www.nisshokonpo.com　E-mail:info@nisshokonpo

トステム・YKK・不二サッシ
ラス・アルミサッシ・スチールドア工事
都知事許可（般-13）第36530号

輝　今村ガラス

（第22期）　今村輝男

〒110-0012　東京都台東区竜泉3丁目9番7号
TEL　03（3873）5927(代)
FAX　03（3873）6369

医療法人社団　飯ケ谷内科クリニック

理事長
医学博士　飯ケ谷清
（第22期）

千葉県鎌ケ谷市東道野辺5-19-15

TEL　047（445）8881

丸喜株式会社　20期

MARUKI

代表取締役会長
河原啓介

本　社
〒111-0032 東京都台東区浅草6－4－12
Phone:03-3876-1751 Fax:03-3875-6168
http://www.maruki-net.com
E-mail:k-kawahara@maruki-net.com

そばの匠
みつまさ

住所／〒130-0022
東京都墨田区江東橋
4－20－4
TEL／03-3631-5850
定休日：土曜及び祝日です
河西紀道
（第25期）

（墨田区銘品名店会）
手打蕎麦

税理士
社会保険労務士
行政書士
石川　昭

石川昭税理士事務所
石川社会保険労務士事務所
行政書士　石川昭事務所

〒224-0001 横浜市都筑区中川1-18-11皆川ビル4階
TEL 045-911-5454 FAX045-911-5396
Eメール　akira-ishikawa@tkcnf.or.jp
自宅　都筑区中川1-2 A801　TEL 045-912-5056

小型生コン製造販売
日本工業規格表示認定工場
小野建材工業株式会社
代表取締役　小野雄久（タケヒサ）
（第二六期）

事務所
〒132-0035 東京都江戸川区平井七丁目二番二十九号
電話〇三（三六一七）四一一一（代）～三番
FAX〇三（三六一七）四一一六番
自宅
〒132-0035 東京都江戸川区平井七丁目七十二番一号
電話〇三（三六一一）五〇四〇番

『両国の駅のおそばの大関庵
味も良ければ盛りもよいよい』

そば処　大関庵
19期　大関　守

JR両国駅西口
国技館通り中程
TEL.03—3631—0728

株式会社　早川商会
代表取締役　早川嘉一
第26期　（卓球部）
〒123-0873 東京都足立区扇1-45-22
TEL　03-3898-3336・6996
FAX　03-3889-6909
hayakawa-s@tokyo.email.ne.jp
特殊製袋加工・印刷　紐付巾着袋・フィンバッグ・手提バッグ
テープハンドルバッグ・LD丸底袋
LDジャケット袋・ファイル用袋各種

株式会社　杉本好二商店
代表取締役　杉本光男
第26期　（卓球部）
〒130-0002 東京都墨田区業平1-17-5
TEL　03-3623-2185
FAX　03-3623-1859
砂利・砂・セメント・砕石
生コンクリート・アスファルト　販売店

有限会社　みのる不動産
東京都宅地建物取引業協会会員
代表取締役　三川廣志
（第34期）
■亀戸店　東京都江東区亀戸7丁目11番12号京葉道路面
TEL（3684）5851㈹　FAX（3684）5850
E-mail:mk@e-minoru.com
■本　店　東京都江東区北砂7丁目4番3号環状四号面
TEL（3644）7537㈹　FAX（3640）2543

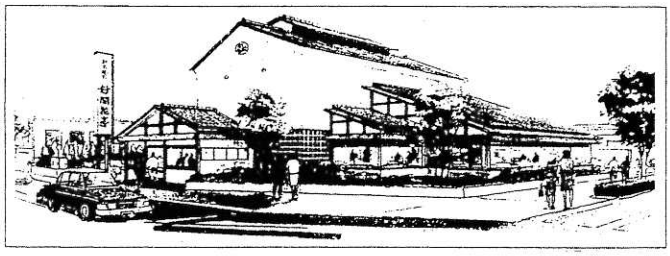
創業 文久年間

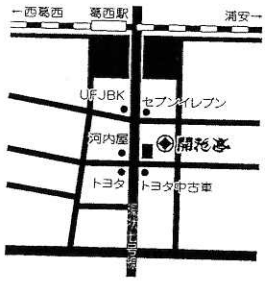
創業文久三年

素材の良さと
伝統の味を
守り続ける老舗

割烹 とよだ

東京都中央区日本橋室町
1-12-3
電話 03-3241-1025
（日・祝日休み）
橋本　敬（20期）
http://www.n-toyoda.com





ベーカリーレストラン マルコ
MARUKO　3656-5211
しゃぶテキ亭　3656-5629
春　江　店　5677-0101
葛　西　店　3689-0101
柴又街道　花炎亭　3677-8601
八千代村上 とんかつ 大和楽　047-405-5110
昭和36年卒28期生
代表取締役　田中　稔

当店では、ご宴会・ご会合・法事や各種パーティー等人数・ご予算に応じて承っております。

営業時間　AM11:00～PM11:00

お食事処 開花亭 葛西店

中小企業、納税者の権利拡充に努めます。

荻野会計事務所

税理士　荻野　弘康（第二十二期）

東京都荒川区南千住五－二五－十四
〒一一六－〇〇〇三
TEL:〇三－三八〇三－二三二八
FAX:〇三－三八〇五－二〇六九
MAIL:zei_ogi@d3.dion.ne.jp

～同級生からのコメント～

昭和29年10月第1回全国高等学校簿記コンクールに出場団体戦優勝都立三商（荻野・西脇・中川）
個人の部優勝（荻野弘康）

江戸蕎麦手打處

あさだ

江戸時代より続く伝統のわざと味

（第二八期）　粕谷　安孝

二階座敷二〇名、椅子席一〇名にてクラス会等にご利用頂いております

コース料理、鴨なべ、鳥すき等揃えてお待ちしております

定休日　日曜祝日

台東区浅草橋二－二九－十一
江戸通り浅草橋と蔵前の中程
電話　〇三（三八五一）五四一二

あさだHP http://www.asada-soba.co.jp

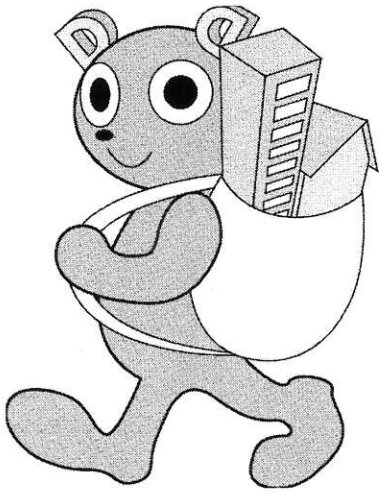
Law Office
一橋法律事務所
TEL 042 345 2722
弁護士 越路正巳（22期）

第十五期　同期生一同
世話人一同

創業明治四〇年　下町の味を伝えて一世紀
うなぎ 川勇
高木利夫（第三十三期）
元史学部
〒一三〇-〇〇一一
東京都墨田区石原三-三〇-九
TEL：〇三-三六二二-五五九二
FAX：〇三-三六二二-五五九二
E-mail:unagiya@com.home.ne.jp

旨い　安い
下関ふぐ・地鶏ちゃんこ
鳥義
30期　氏家　賢
本館／墨田区石原3-18-4
電話　03-3626-4466
別館／墨田区石原3-17-3
電話　03-3622-8343
FAX　03-3622-8349
http://e-sumaida.gr.jp/toriyosi/

どじょうすくい踊り教室
読売日本テレビ文化センター錦糸町
（第1&3日曜日　10：00～11：30）
朝日カルチャーセンター千葉
（第2&4金曜日　13：00～14：30）
講師 後藤省三
（28期）
安来節保存会 踊師範（大利根支部）
〒272-0033 千葉県市川市市川南1-1-8-808
TEL&FAX 047-321-0786

有限会社 平林油店
（エネオス給油所 特約店）
平林 慶雄
（第21期）
南砂給油所
江東区南砂3-4-5 TEL:03-3644-6161
宇喜田給油所
江東区宇喜田町1223 TEL:03-3680-2541
自宅（本社）
江東区南砂4-19-13 TEL:03-3644-4487

生活空間応援します
土地建物の賃貸・売買・仲介
不動産管理
戸建・マンション分譲
住宅リフォーム
清掃事業までの一貫業務
ご売却査定・お住み替え・賃貸管理・その他
不動産に関することなら何でもご相談ください!!
（社）東京都宅地建物取引業協会会員　東京都知事免許（11）第26577号　土地建物売買仲介管理
大雄開発株式会社
代表取締役 松岡雄治（第26期）
〒136-0072　江東区大島2－41－17
TEL：03-3636-3111　FAX：03-3636-3115
URL http://www.daiyukk.co.jp　E-mail matsuoka@daiyukk.co.jp